



TITLE:

李義山七律集釋稿(四)

AUTHOR(S):

李義山七律注釋班

---

CITATION:

李義山七律注釋班. 李義山七律集釋稿(四). 東方學報 1985, 57: 693-740

ISSUE DATE:

1985-03-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/66638>

RIGHT:

# 李義山七律集釋稿(四)

## 李義山七律注釋班

\*掲載詩篇目

飲席戲贈同舍	47	.....	充五頁
曲池	132	.....	充九頁
楚宮二首之二	265	.....	七四頁
楚宮二首之一(付載)	264	.....	七三頁
和友人戲贈二首之一	266	.....	七四頁
和友人戲贈二首之二	267	.....	七九頁
題二首後重有戲贈任秀才	268	.....	七四頁
春雨	274	.....	七九頁
和韓錄事送宮人入道	324	.....	七四頁

\*唐音統籤が「情詞」に分類する七律から八首を載せ、七絶一首を付載する。

\*席本李商隱詩集を底本とし、とりあげまたは引用する義山の詩には底本の排列による作品番號を記す。「李義山詩各本篇目對照表」

李義山七律集釋稿(四)

(本學報五〇冊) 參照。

\*義山の文の引用は樊南文集詳註および樊南文集補編により、「文集」および「補編」と略稱する。

\*文獻(7)の唐詩は、絕句が萬首唐人絕句、絕句以外の詩體が(5)の叢刊本と同系のテキストを底本とする。文獻(9)の唐詩類苑も、叢刊本と同系のテキストを底本とする。

\*舊注をふまえるばあいも原則として注者の名を明示しない。舊注諸本の詩釋については、釋者の名を掲げ、原則として全文を載せる。

\*詩釋のうち、朱鶴齡の項の「補注」は文獻(1)順治刊本各卷末に付されるもの。また何焯と紀昀の項の「評本」は(12)沈氏輯評本をさす。

\*主要文獻一覽

一 無注本

- (1) 李商隱詩集三卷 唐詩百名家全集本(席本)
- (2) 李商隱詩集三卷 影印錢謙益寫校本(錢本)

(3) 李義山集三卷 唐人八家詩本(毛本)

(4) 全唐詩(三卷)

(5) 唐李義山詩集六卷 四部叢刊本

(6) 唐晉統鑑(十卷)

(7) 唐詩(十一卷) 藝文印書館影印本(稿本)

(8) 李商隱詩集十卷補遺一卷 高麗刊本(懷德堂文庫藏)

(9) 唐詩類苑二百卷

二 舊注諸本

(10) 玉溪生詩箋 錢龍惕撰(靜嘉堂文庫藏)

(11) 李義山詩集三卷 朱鶴齡箋注(順治十七年序刊本)

(12) 李義山詩集三卷 朱鶴齡箋注 沈厚燠輯評

(13) 西崑發微三卷 吳喬撰

(14) 義門讀書記李義山詩二卷 何焯撰

(15) 李義山詩疏二卷 徐德泓·陸鳴皋撰(徐陸合解)(懷德堂

文庫藏)

(16) 李義山詩集十六卷 姚培謙箋

(17) 玉溪生詩意八卷 屈復撰

(18) 重訂李義山詩集箋注三卷集外詩箋注一卷 朱鶴齡元本 程

夢星刪補

(19) 玉溪生詩說二卷 紀昀撰

(20) 玉溪生詩詳註三卷 馮浩撰

(21) 玉谿生年譜會箋四卷·李義山詩辨正不分卷 張采田撰

三

(22) 李義山詩偶評三卷 黃侃撰

唐詩選本注釋

(23) 註唐詩鼓吹十卷 郝天挺撰 廣文書局影印元刊本

(24) 唐詩鼓吹註解大全八卷 廖文炳撰(內閣文庫藏)

(25) 唐詩鼓吹十卷 元好問輯 郝天挺注廖文炳解 王清臣·陸

貽典參解

(26) 唐才子詩甲集七言律八卷 金聖嘆撰

(27) 才調集十卷 韋穀輯 馮舒·馮班評(二馮評閱本)

(28) 才調集補註十卷 殷元勳箋註 宋邦綏補註

(29) 唐詩貫珠六十卷 胡以梅撰

四

近代注釋

(30) 李義山詩講義 森槐南

(31) 李義山の無題詩 鈴木虎雄(中國文學報六冊)

(32) 李商隱 高橋和巳(中國詩人選集一五)

(33) 李商隱表現考·斷章——艷詩を中心として——山之內正

彥(東洋文化研究所紀要四八冊)

(34) The Poetry of Li Shang-yin 劉若愚

(35) 李商隱詩選 安徽師範大學中文系古代文學教研組

(36) 李商隱詩選 陳永正

飲席戲贈同舍47 飲席にて戲に同舍に贈る

洞中屐響省分携 洞中屐響き 分携を省ゆ

不是花迷客自迷 是れ花の迷わずならず 客自ら迷う

珠樹重行憐翡翠 珠樹重行 翡翠を憐み

4 玉樓雙舞羨鵲雞 玉樓雙舞 鵲雞を羨む

蘭迴舊蕊屏緣綠 蘭は舊蕊を廻し 緣緑を屏い

椒綴新香和壁泥 椒は新香を綴り 壁泥に和す

唱盡陽關無限疊 唱い盡す陽關 無限疊

8 半盃松葉凍頗黎 半盃の松葉 頗黎凍る

校

0 唐詩類苑一〇三（人部嘲戲類）

5 蕊 高麗本「腕」

屏緣 高麗本「緣屏」 朱鶴齡本・全唐詩「緣屏一作屏緣」 錢本

「緣屏」を「屏緣」に改む

7 陽關 叢刊本・類苑・統籤・錢本・毛本・高麗本「關山」 朱

鶴齡本校注「一作關山。非」 稿本「關山」を「陽關」

に改む

8 頗黎 高麗本「玻瓈」

韻

上平十二齊（携・迷・雞・泥・黎）獨用

\*

朱彝尊

李義山七律集釋稿（四）

8 言洞中佳麗如此。而行人將去。別酒亦涼且盡矣。

何焯

〔讀書記〕左思吳都賦。翡翠列巢以重行。謝惠連雪賦。對庭鵲之雙舞。程漸于疑補註義山詩集。引以證珠樹二句。則重行雙舞。俱有着落（評本 本條なし）。

徐德泓

此贈同舍挾妓者。當有兩人。故曰分携。又曰重行雙舞也。省乃省記之省。作知字解。言聞洞中屐響。而知其各携所好也。次聯。形容情好之比昵。腹聯。則狀房室之芬芳。末則不忍別離。故無情戀飲而酒冷也。凍字特妙。

姚培謙

此因席有美人。同舍爲之傾倒。而詩以戲之也。分手花源。洞中屐響。迷魂顛倒。眞無可奈何之時。翡翠重行。鵲雞雙舞。不知此願何時得遂耳。於時溫香煖玉。無情者俱化作有情。屏上蘭芳。爲之吐蕊。壁間椒氣。亦若增香。無奈陽關唱斷之後。終歸分手。半杯松葉。酒與淚俱。不覺已凍作頗黎也。所謂煖玉溫香者。果何在哉。蓋卽諺所謂醒眼看醉人者。

屈復

一二。同舍與美人分携。遂迷而不捨。三四。洞中佳麗重重。五六。洞中佳境種種。末言陽關唱盡。杯酒已闌。而同舍猶不忍去也。

程夢星

題曰戲贈同舍。詩曰花迷。乃旁觀冶遊惜別者而作。重行雙舞。言

其合歡。椒壁蘭屏。言其栖止。結則道其對酒當歌。黯然銷魂之致也。

紀昀

〔詩說下〕何以不取飲席戲贈同舍也。曰。氣格不脫晚唐靡靡之習〔評本「晚唐靡靡之言」〕。

馮浩

陸〔崑曾〕曰。此必同舍戀其所歡。不能別去。戲贈是詩也。浩曰。陸已悟到。余更定爲梓州府罷作耳。次聯。憐翡翠。羨鸚鵡。歎人之不如物也。五六。則因舊新相代。居處重葺。眞欲留無計矣。結則歌殘酒冷。黯然魂銷也。

0 當是餞席。

2 官妓豈長戀故人。人每自迷耳。

6 西京雜記。溫室以椒塗壁。漢官儀。皇后稱椒房。取其實蔓延。

外以椒塗。亦取其溫。世說。石季倫以椒爲泥。蜀都賦注。岷山特多藥草。其椒尤好。雖詩意不主此。亦可取證。

8 天竺記。大雪山中有寶山。諸七寶並生取可得。惟頗黎寶。生高峰難得。玄中記。大秦國有五色頗黎。紅色最貴〔御覽八〇八〕。

此謂酒杯。

張采田

〔會箋〕馮氏定爲梓州府罷作。似之。蓋同舍戀其所歡。不忍別去。故戲贈也。與上篇〔梓州罷吟寄同舍365〕參看。

〔辨正〕以晚唐詩爲靡靡之音。此乃明七子分門別戶之陋習。況此

詩音調流美。而筆力仍自老潔。神味仍自沈著。豈可以皮相定其優劣邪。

近代注釋

〔山之內正彥〕一一八頁。

\* \*

0 義山の類似的詩題として、〔飲席代官妓贈兩從事173〕〔梓州罷吟寄同舍365〕〔縣中惱飲席443〕。このうち173・365の二篇とともに劍南東川節度使柳仲郢幕下における最後の年の作とされる。馮浩は大中年、張采田・安徽師大年表は大中九年。

戲贈 詩題として早いのは玉臺新詠七の簡文帝の「戲贈麗人」。また上官儀に「和太尉戲贈高陽公」詩あり。

同舍 〔漢書四六直不疑傳〕爲郎。事文帝。其同舍有告歸。誤持其同舍郎金去。已而同舍郎覺。亡意不疑。不疑謝有之。買金償。〔杜甫潭州送韋員外迢牧韶州詩〕分符先令望。同舍有輝光〔趙彥材云。公亦是員外郎。故於韋員外可謂之同舍矣〕。

〔梓州罷詩黃侃注〕同舍謂同幕府者。〔偶成〕轉韻詩562。征東同舍鸞與鸞。亦謂同幕府者。

1・2 義山にまた〔寄惱韓同年時韓住蕭洞二首之二401〕龍山晴雪鳳樓霞。洞裏迷人有幾家。いづれも洞天・仙女・魅惑のモチーフ。劉阮天台と桃花源の話をふまえる。〔中元作275〕不知迷路爲花開の注參照、集釋稿〔本學報五六冊三二八頁〕。

1 洞中 洞は洞房。また洞天之連想から別世界の仙宮を思わせる

すまいをもちます。〔王維奉和聖製玉眞公主山莊詩〕洞中開日月。  
窓裏發雲霞。〔杜甫鄭駙馬宅宴洞中〕明皇臨晉公主下嫁鄭潛曜。神禾原有蓮花洞。乃鄭氏故居。主家  
陰洞細煙霧。留客夏簾清琅玕。〔元稹夢遊春詩〕夢入深洞中。遂  
果平生趣。

展響 類似的用例として〔李紳姑蘇臺雜句序〕臺今遺迹平蕪。  
連接靈岩寺。採香徑。響屧廊。皆在寺內。

省 義山の〔野菊254〕細路獨來當此夕。清樽相伴省他年。と同  
様に解する。〔省、猶記也、憶也。〕〔詩詞曲語辭匯釋五〕

分携 義山以前の用例未見。

2 花迷 〔李白襄陽曲四首之一〕江城回渌水。花月使人迷。〔白  
樂天錢塘湖春行〕亂花漸欲迷人眼。淺草纔能沒馬蹄。次の例があ  
るいは端的に花（人ヲ）迷ワスとよめるか。〔李德裕述夢詩〕花  
迷瓜步暗。石固蒜山牢。

誘惑の主體としての花の例。〔元稹天壇歸詩〕爲結區中緣。因  
辭洞裏花。〔又離思五首之四〕取次花叢嬾回顧。半緣修道半緣君。  
〔又夢遊春詩〕覺來八九年。不向花廻顧。〔白樂天和夢遊春詩〕  
京洛八九春。未曾花裏宿。

客自迷 〔李白春日遊羅敷潭詩〕雲從石上起。客到花間迷。  
〔又襄陽歌〕落日欲沒岷山西。行客辭歸花下迷。〔溫庭筠經西塢  
偶題〕搖搖弱柳黃鸝啼。芳草無情人自迷。

3 〔張九齡感遇十二首之四〕側見雙翠鳥。巢在三珠樹。  
〔文選五左思吳都賦〕山雞歸飛而來棲。翡翠列巢於重行（劉淵

林注 翡翠巢於樹顛生子。夷人稍徙下其巢。子大未飛便取之。

珠樹 〔山海經海外南經〕三珠樹。在厭火北。生赤水上。其爲  
樹如柏。葉皆爲珠。〔淮南子墜形訓〕禹：掘昆侖虛以下地。中有  
增城九重。：珠樹玉樹璇樹不死樹在其西。〔李白送賀監歸四明詩〕  
借問欲棲珠樹鶴。何年却向帝城飛。

4 〔文選一三謝惠連雪賦〕對庭鵬之雙舞。瞻雲鴈之孤飛（李注  
西京雜記曰。公孫乘月賦曰。鵲雞舞於蘭渚。蟋蟀鳴於西堂。

〔傅毅洛都賦〕弋高冥之獨鵠。連軒翥之雙鵠（陸機齊謳行李善  
注）。

玉樓 〔崑崙〕其一角有積金爲天墉城。面方千里。城上安金臺  
五所玉樓十二所（雲笈七籤二六）。〔駱賓王帝京篇〕桂殿陰岑對玉  
樓。椒房窈窕連金屋。〔李白宮中行樂詞八首之二〕玉樓巢翡翠。  
金殿鎖鴛鴦。

雙舞 〔庾信和詠舞詩〕洞房花燭明。燕餘雙舞輕。

鵲雞 〔楚辭九辨〕鴈離離而南遊兮。鵲雞啁啾而悲鳴。〔文選  
八司馬相如上林賦〕躡玄鶴。亂昆雞（郭璞注 張揖曰。昆雞。似  
鶴黃白色）。

5・6 〔文選五八顏延之宋文帝元皇后哀策文〕蘭殿長陰。椒塗  
弛衛。嗚呼哀哉（李注 漢武故事曰。帝以七月七日旦生於猗蘭  
殿）。〔後漢書皇后紀贊〕班政蘭閣。宣禮椒屋（李賢注 班固西都  
賦曰。後宮則掖庭椒房。后妃之室。蘭林蕙草。披香發越。蘭林。  
殿名。故言蘭閣）。〔梁元帝烏棲曲〕蘭房椒閣夜方開。那知步步香

風逐。

5 蘭迴舊蕊

〔庚信和宇文文內史入重陽閣詩〕舊蘭憔悴長。殘花爛熳舒。〔劉禹錫送春詩〕蘭蕊殘妝含露花。柳條長袖向風揮。〔韓愈楸樹二首之二〕傍人不解尋根本。却道新花勝舊花。

屏緣綠 未詳。訛謬あるか。

6

〔應劭漢官儀下〕皇后稱椒房。取其蕃實之義也。…以椒塗室。取溫暖除惡氣也。〔三輔黃圖三未央宮〕椒房殿。在未央宮。以椒和泥塗。取其溫而芬芳也。〔庚信夢入堂內詩〕雕梁舊刻杏。香壁本泥椒。

新香

〔李賀五粒小松歌〕蛇子蛇孫鱗蜿蜒。新香幾粒洪崖飯。

7

義山の作になお〔贈歌妓二首之一63〕斷腸聲裏唱陽關。陽關三疊とは、東坡によれば第一句をのぞき二・三・四句をそれぞれ再唱するのだという。七絶集釋稿(二)本學報五一冊五九一頁陽關の注参照。

8 半盃

義山にまた〔江亭散席循柳路吟歸官舍19〕春詠敢輕裁。銜辭入半盃。

松葉

すなわち松葉酒。米と松葉の煮汁を原料とする。〔王績贈學仙者詩〕春釀煎松葉。秋盃浸菊花。〔張九齡答陸禮詩〕松葉堪爲酒。春來釀幾多。庚信や王維の詩にも見える。〔潭州20〕松醪の注参照、集釋稿(二)本學報五四冊三八七頁。

頗梨

〔廣韻二破字注〕玻瓈玉。西國寶。〔玄應音義二〕頗梨…西國寶名也。…此云水玉。〔慧琳音義四一〕形如水精。光瑩精

妙於水精。有黃碧紫白四色差別。〔慧苑音義上〕頗梨色…其狀少似此方水精。然有亦有白等也。〔酉陽雜俎前集一一廣知〕頗梨。千歲水所化也。〔韓愈遊青龍寺贈崔大補闕詩〕二三道士席其間。靈液屢進玻瓈盃。

\* \* \*

舊注は、(A)妓女(?)と別れがての同舎への戲言とする徐德泓・姚培謙・屈復・程夢星ら、(B)「行人」すなわち同舎への送別(朱彝尊)または同舎への留別(馮浩・張采田)の意をもよこむ説、と二様に分れるが、B説特に馮氏のように状況を細かく限定できるか否か不安が残る。山之内氏も恐らくA説をとるか。

1 仙女の住むきらびやかな・なまめかしい洞房に木屐の響きばかりが耳についたあの別離のときがまざまざ(君の)心に残っている。一作は同舎の經驗を描寫したものとすれば、最低限7・8句をのぞき過去の敘述とせざるをえず、省を「知字」と解するのは(徐德泓)、通じやすそうに見えて實は非である。分携は分手なると同義と思われるので、これも徐氏の解をとらない。

2 これはどまで感亂されてしまったのも、洞天の花が迷わせたためではなく、入りこんだ客(たる君)が勝手に迷ってしまった、自業自得さ。

3・4 さてその仙境では、珠玉の葉茂る樹木に並んで巣づくりする翡翠もいとしく、玉樓の軒端に舞う雌雄の鷓鴣もうらやましい。あたりを見れば、いずれも仲むつまじい番いの鳥たちばかり。

5 6句椒壁と對し、閨房ないしその調度に係わる表現だろうが、屏縁縁がよめず、縁屏縁と改めてみても大差ない。強いて解すれば、もはや開きすぎた蘭の花が一齊に振り向いて縁の縁(?)をさえぎる。麗本の異文「舊晚」では「廻」とうまくつながらない。

6 女人の部屋にふさわしく壁土に塗りこめられたばかりの新しい山椒の香りがたよう。

7・8 別れの曲、陽關を未練がましく三度はおろか無限の回数、(君は)歌って歌って歌いつくす——ふと氣づけば、盃に半ば残った松葉酒は凍てついて玻璃となっていた。7句の異文「關山」はもとより非。8句頗黎、馮浩は酒杯とするので、「頗黎ニ凍ル」とよんだのだろうか、姚培謙の方が詩のよみとして順當。また姚氏が見抜いたとおり、「同舍」の経験のなかでは1句が時間的に最も遅く、7・8句のあとに來るとせねばならぬ。馮浩注ではこの一連のみが現在の「餞席」。

(西村富美子)

### 曲池 132 曲池

日下繁香不自持 日下の繁香 自持せず  
月中流豔與誰期 月中の流豔 誰とか期す  
迎憂急鼓疎鐘斷 迎憂す急鼓疎鐘の斷つに  
4分隔休燈滅燭時 分隔す休燈滅燭の時に

李義山七律集釋稿(四)

張蓋欲判江灤灤 蓋を張り判せんと欲すれば 江は灤灤たり  
廻頭更望柳絲絲 頭を廻し更に望めば 柳は絲絲たり  
從來此地黃昏散 從來此の地 黃昏に散ず  
8 未信河梁是別離 未だ信ぜず河梁是れ別離と

校

0 唐詩類苑三六(水部池類)

5 判 高麗本は空格

8 是 稿本旁注「足」

韻

上平五支(離) 七之(持・期・時・絲) 同用

\*

吳喬

首二句。謂白日猶不可知。黑夜更何能料。次二句。在未別時預憂分。張蓋。別時也。判者。捨之而去也。廻頭。別後也。望者。去而不忘也。即此大是不堪。何必蘇李胡漢之別。乃是悲乎。

0 此詩似與綯遊觀時作。

朱彝尊

0 此必當時讌集之地。

何焯

〔評本〕一往情深。

徐德泓

此借題傷別而寓去國之思也。前半。言花于日下。不克自持。尙爲



誰而夜開乎。似比不能自固于君。則無屬矣。是以將晚而愁。既夜而別。猶云恩衰則憂。恩絕則去也。後半。言既不得不去。而尙不能忘情。昔謂河梁惜別。豈能抵此地之慘乎。讀此。可想見款段出都之情況矣。

## 姚培謙

曲池。乃所懷之地。故以命題。日下繁香。本來易落。月中流豔。却與誰期。此間有頃刻不忍別之意。而無如急鼓疎鐘斷處。輒復迎憂。休燈滅燭之時。便成間隔也。此即第七句所謂從來此地黃昏散者。豈知尙是短別未是長別。忽而張蓋中流。迴頭舊地。不覺視此雖近。邈若河山矣。然則昨夜黃昏。草草作別時。曲池已便是河梁也。分手即天涯。豈不信然。

## 屈復

起二句。思無日夜。三。正當好會時。四。又不能會。五。欲去。六。又不忍遽去。故結言此地之別。更慘於河梁也。

## 程夢星

此題曲池恐誤。當是曲江。詩似於長安有所不足於同年故人者。按唐人有責同年不與曲江遊宴者云。紫陌尋春。便隔同年之面。青雲得路。懸知異日之心。此詩即此義也。起二句。言風花香豔。晝夜可遊。我乃不能自持。人則誰與期集。三句。言即使可期。不過片時。急鼓疎鐘。憂愁迎去矣。四句。言終難契合。豈有長期。滅燭休燈。隔離情分矣。五句。言獨坐無聊。已亦將去。江波濺濺。欲張蓋而渡之。六句。言當此好景。未免有情。柳線絲絲。更回頭而

騁望。七八句。從更望二字生出感慨。言來遊此地。率多輕薄之徒。飲酒言歡。情如膠漆。而黃昏散去。輒已相忘。彼固謂從來交情。不過如此。直不信古有蘇李河梁之事矣。豈不深可歎哉。

## 紀昀

〔詩說下〕何以不取曲池也。曰。此與一歲林花一首106。同一意調。但彼氣脈較深厚。一結亦不似此之盡言盡意。故舍此取彼。凡詩無情致。則粗浮不文。然但有姿媚而乏筋節。其弊亦有不可勝言者。遷流所至。不得不預爲防也。

〔評本〕詩無情致。則粗獷不文。但取姿媚而乏筋節。其弊亦不可勝言。○迎憂字太造。休燈滅燭四字複。結亦太盡。

## 馮浩

此宴飲既罷。有所不能忘情之作。與上章（鏡檻301）略同。非義山將行役也。

1 按爾雅。觚竹北戶西王母日下。謂之四荒。日下字本此。而日爲君象。後人以之稱京師。

5 言登舟張蓋而歸。

## 張采田

〔會箋〕首句。情不自禁。次句。竟不見答。三四。侵晨而往。涉暮始歸。張蓋二句。留連不忍去之意。結言從前何嘗有此。今則距人千里。無異生離死別矣。必非豔情。蓋亦寓意令狐之作。晉昌里面曲池。頗可與上篇（即日325）同參。

〔辨正〕晚唐詩派。多有此種看似姿媚無骨。實則潛氣內轉。迥非

後世滑調所能假託。紀氏一概詆之。此未能致力唐賢詩律。所以語不中肯也。○曲池。卽曲江也。余疑義山在京會携家在此。此其別閨人作乎。後有曲水閑話260暮秋獨遊曲江373二詩。似可互證。○思歸詩422。舊居連上苑。更可互證。余謂義山在京居曲池。固非臆說也。

黃侃

曲池蓋卽曲江。觀第五句可知。此詩爲宴集惜別之作。首句。言驟遇繁香。難于自禁。次句。想其夜來更當何往。三句。慮其將行。迎憂。猶言豫愁爾。四句。言其果去。與次句相應。七八句。言惜別之情。過于河梁也。○分。亦當時方語。猶今言料定爾。

金聖嘆

此是先生觀無常詩。而特指曲池。以寄意也。言日下繁香。我或不得自持。若月中流豔。則復與誰爲期乎。甚言欲別卽竟別。初無尙須不別之故者也。然而終亦不忍其遽別者。誠預憂急鼓疎鐘。此時一至。卽以後休燈滅燭。與汝永違。爲是而臨期迴惑。不知所措是則誠有之也。○某嘗憶七歲時。眼窺深井。手持片瓦。欲竟擲下。則念其永無出理。欲且已之。則又笑便無此事。既而循環摩挲。久之久之。瞥地投入。歸而大哭。此豈宿生亦嘗讀此詩之故耶。至今思之。尙爲惘然。因附識於此。張蓋欲判。眼前便真有如此一輩粗率可笑人。迴頭更望。某嘗告諸同學。學道人。須是世間第一情種始得。今只看先生此語。便大信也。蓋千古人流浪生死。止爲生生世世。張蓋便判。一切諸佛大師

得成正覺。亦止爲時時刻刻。回頭更望。故也。末又言河梁未抵此別者。從來此事。下愚之夫。以爲聊爾。上智之士。無不大驚極痛也。下愚之夫。亦能大驚極痛。只是爲期稍遲耳。言百年既盡。臨死之日也。

近代注釋

〔森槐南〕中卷九五頁。

\* \*

0 曲池 〔馮浩注〕按。卽曲江也。漢書宣帝紀(三年春。起樂遊苑)注。立廟於曲池之北。後人謂在曲江之北也。又名曲水。唐書及詩文中。曲池曲水習見。如本集曲水閑話260。是也。長安志。街東第四街之最南。名曲池坊。坊南街抵京城之南面。以近曲江園。故名。〔垂柳131〕娉婷小苑中。婀娜曲池東。〔卽日253〕小鼎煎茶面曲池。白鬚道士竹間棋。

一應馮浩に從つておくが、曲池はもとより普通名詞としても習見する。〔楚辭招魂〕坐堂伏檻。臨曲池些(王逸注 臨曲水清池。可漁釣也)。〔文選〕二十六陸厥奉答內兄希叔詩〕杜門清三逕。坐檻臨曲池。〔謝朓曲池之水樂府〕〔白樂天江樓月詩〕嘉陵江曲曲江池。明月雖同人別離。

1 日下 〔孟浩然荆門上張丞相詩〕日下瞻歸翼。沙邊厭曝鰓。〔劉長卿送陸澧倉曹西上詩〕日下鳳翔雙闕迥。雪中人去二陸楮。繁香 用例未見。類似的語彙としては〔沈亞之乞巧文〕襲馨旦之繁芳兮。因文映而增綺。〔李紳滁陽春日懷果園閑宴詩〕西園到日栽桃李。紅白低枝拂酒杯。繁豔只愁風處落。醉筵多就月中開。

〔李德裕憶平泉雜詠・憶新藤〕清香凝島嶼。繁豔映莓苔。

不自持 〔玉臺新詠五沈約雜詠五首春詠〕楊柳亂如絲。綺羅不自持。〔又九蕭繹春別應令四首之三〕門前楊柳亂如絲。直置佳人不自持。〔文選二六任昉贈郭桐廬詩〕望久方來萃。悲歡不自持。

〔劉允濟賦得芍藥詩〕仙禁生紅藥。微芳不自持。〔溫庭筠舞衣曲〕芙蓉力弱應難定。楊柳風多不自持。

2

〔霜月8〕青女素娥俱耐冷。月中霜裏鬪嬋娟。〔和馬郎中移白菊見示534〕素色不同籬下發。繁花疑自月中生。

月中 〔梁簡文帝傷別離詩〕月中含桂樹。流影自徘徊。〔蕭慤秋思詩〕芙蓉露下落。楊柳月中疎。〔盧綸白牡丹詩〕別有玉槃承露冷。無人起就月中看。

流豔 〔謝偃影賦〕既寄形于流豔。又匿跡于凝陰。〔孟郊嵩少詩〕流豔去不思。朝英亦疎微。

與誰期 義山の詩にまた〔莫愁231〕雪中梅下與誰期。梅雪相兼一萬枝。

3

〔初起53〕想像咸池日欲光。五更鐘後更廻腸。〔七絕集釋稿〕本學報五一册五八一頁。〔無題111〕嗟余聽鼓應官去。走馬蘭臺類斷蓬。〔集釋稿〕本學報五三册六一二頁。〔鐘檻301〕豈能拋斷夢。聽鼓事朝珂。唐代的鐘鼓の制は〔促漏195〕促漏遙鐘の注參照、集釋稿〔本學報五四册四二四頁〕。

迎憂 〔鮑照傷逝賦〕髮迎憂而送華。貌先悴而收藻。共甘苦其幾人。曾無得而偕老。

急鼓 〔孫策討黃祖表〕臣以十一日平旦。：同時俱進。身跨馬攔陳。手擊急鼓。以齊戰勢。ただしここでは陣太鼓ではなく漏鼓だ。

疎鐘 〔徐陵玉臺新詠集序〕厭長樂之疎鐘。勞中官之緩箭。

〔王維酬郭給事詩〕禁裏疎鐘官舍晚。省中啼鳥吏人稀。〔李白夕霽杜陵登樓寄韋繇詩〕思君達永夜。長樂聞疎鐘。

4 分隔

〔後漢書鄭弘列傳二三〕時舉將第五倫爲司空。班次在下。每正朔朝見。弘曲躬而自卑。帝問知其故。遂聽置雲母屏風。分隔其間。〔又獨行范冉列傳七二〕〔王〕免曰。行路倉卒。非陳契闊之所。可共到前亭宿息。以敝分隔。冉曰。：今子遠適千里。會面無期。故輕行相候。以展訣別。

休燈 用例未見。

滅燭 (A)〔史記一二六淳于髡傳〕日暮酒闌。合尊促坐。男女同席。履舄交錯。杯盤狼籍。堂上燭滅。主人留髡而送客。羅襦襟解。微聞薝蔔。當此之時。髡心最歡。能飲一石。〔李白寄遠十二首之七〕一爲雲雨別。此地生秋草。：何由一相見。滅燭解羅衣。

(B)〔梁簡文帝夜夜曲〕愁人夜獨傷。滅燭臥蘭房。祇恐多情月。旋來照妾牀。〔樂府詩集七六。ただし同書目錄では「唐王偃」の作とする。王偃は時代不詳〕。

5 張蓋

〔文選一班固西都賦〕於是後宮乘輅輅。登龍舟。張鳳蓋。建華旗。〔後漢書方術徐登傳〕又嘗臨水求度。船人不和之。〔趙炳乃張蓋坐其中。長嘯呼風。亂流而濟。〔王褒別陸才子詩〕解纜

出南浦。征棹且凌晨。還看分手處。唯餘送別人。中流搖盞影。邊江落騎塵。

判〔朱鶴齡注〕拈同。〔又效江南曲380〕乖期方積思。臨醉欲拌嬌〔朱注引陳帆曰。拈嬌。如諺云放嬌也。〕

瀟瀟〔廣韻四瀟字注〕激瀟。水波動貌。〔何遜望新月詩〕的的與沙靜。瀟瀟逐波輕。〔張若虛春江花月夜詩〕瀟瀟隨波千萬里。何處春江無明月。この疊字を愛用するのは義山よりやや先輩の趙嘏（八〇六？―）で、〔獻淮南李僕射詩〕馬嘶紅葉蕭蕭晚。日照長江瀟瀟秋。など、六例がある。

6 迴頭〔玉臺新詠七簡文帝變童詩〕攬袂輕紅出。回頭雙鬢斜。〔庾信怨歌行〕回頭望鄉淚落。不知何處天邊。〔杜牧池州送孟遲先輩詩〕秦嶺望樊川。祇得迴頭別。

絲絲 用例未見。

7 〔即日106〕金鞍忽散銀盞滴。更醉誰家白玉鈎〔集釋稿〕本學報五六册三〇一頁。〔無題二首之二125〕此地如携手。兼君不自聊。〔行次西郊作566〕鄴塢抵陳倉。此地忌黃昏。

從來〔文選二六謝靈運永初三年初發都詩〕從來漸二紀。始得傍歸路。〔徐陵雜曲〕張星舊在天河上。從來張姓本連天。

此地〔李白鳳笙篇〕此時惜別詎堪聞。此地相看未忍分。〔又金陵歌送別范宣〕此地傷心不能道。目下離離長春草。〔又送友人詩〕青山橫北郭。白水遶東城。此地一爲別。孤蓬萬里征。

黃昏〔文選一六司馬相如長門賦〕日黃昏而望絕兮。恨獨託於

空堂。〔玉臺新詠一〇姚翻有期不至詩〕黃昏信使斷。銜怨心悽悽。8 未信〔玉臺新詠六王僧孺爲人述夢詩〕工知想成夢。未信夢如此。

河梁〔文選二九李陵與蘇武三首之三〕携手上河梁。遊子暮何之。〔又二七魏文帝燕歌行〕牽牛織女遙相望。爾獨何辜限河梁。〔王融蕭諮議西上夜集詩〕徘徊將所愛。惜別在河梁。〔李白蘇武詩〕東還沙塞遠。北愴河梁別。

別離〔古詩十九首之一〕行行重行行。與君生別離〔李善注楚辭〕九歌少司命曰。悲莫悲兮生別離。〔又之十八〕以膠投漆中。誰能別離此。〔文選一六江淹別賦〕知離夢之躑躅。意別魂之飛揚。故別離一緒。事乃萬族。

\* \* \*

別離を悲しむ相手の性別をめどに舊解を類別すれば、

A 女性

豔情〔馮浩・張采田辨正・黃侃・森槐南〕  
寓意〔徐德泓・張采田會箋〕

B 知友

〔吳喬・程夢星〕

C 性別未詳

〔姚培謙・屈復〕

張氏會箋および吳喬は相手を令狐綯に特定する。なお紀昀とそして金聖嘆が何を考えていたのかはよく分らない。

1・2 きらめく陽光のもと、そのむせかえるような香を押えかね身もだえする〔花〕。そして夜。月光を浴び、晝間とはまた違った流動凄豔の相貌をおびて、〔花は〕だれと歡びを共にする約

を結ぶのか。あふれんばかりの色香をたたえる豊麗・濃豔の女性の三態。1句の目下は京師の意(馮浩)とはみない。不自持の主體は用例によるかぎりあくまでも花(徐德泓)で、花を見る我(程夢星ほか)ではない。2句はやはり姮娥の連想があるか。

3 絶世の美女との逢瀬も、しかし、夜明けを告げるあのせわしい漏鼓、また一打また一打とゆっくり間をおく漏鐘に斷ちきられるのが、はや氣がかりだ。斷の主體は鐘鼓でなく逢瀬とする。

4 いやそれどころか、ともしびを消し、燭の光の滅する歡喜の時間、空しく離れゆかねばならぬのだ。滅燭は李白の用例に従って解する。

5・6 あわただしい逢瀬は過ぎ、(月光に)きらきら光る川面になかなか捨てがたく去りがたい未練を残しつつ舟に乗り、岸邊の方をいま一度望みやると、柳の枝どもがなよなよとゆれる。張蓋は即ち登舟の意。判はもとより平聲。

7・8 そうだ。もともとの地——曲池では黄昏とともに人々がわかれわかれに散ってゆくさだめだった。なにも河梁の別れだけが別離の典型であり、河梁の地だけが運命的な別離の場所だとは簡単に信じられない。

係年は馮浩が開成四年(八三九)、張采田が大中三年(八四九)。安徽師大年表はより慎重で不編年。

(横山 弘)

楚宮二首之二<sup>265</sup> 楚宮

月姊曾逢下彩蟾 月姊曾逢逢う 彩蟾より下りしに  
傾城消息隔重簾 傾城の消息 重簾を隔つ

已聞珮響知腰細 已に珮響を聞き 腰の細きを知り  
4 更辨絃聲覺指纖 更に絃聲を辨じ 指の纖きを覺ゆ

暮雨自歸山峭峭 暮雨自ら歸り 山峭峭

秋河不動夜厭厭 秋河動かず 夜厭厭

王昌且在墻東住 王昌且く墻東に在て住す

8 未必金堂得免嫌 未だ必ずしも金堂に嫌を免るるを得ず

校

0 才調集六・瀛奎律髓七(風懷類)・唐詩鼓吹七・唐詩類苑一五

五(居處部宮類)・詩學禁臠

楚宮 才調集「水天閒話舊事」 統籤「水天閒話舊事」<sup>一作楚宮</sup>

錢本・稿本校注「才調題水天閒話舊事」 全唐詩校注

「此首一本題作天水(?) 閒話舊事」

1 逢 鼓吹「聞」

4 絃 律髓「絃<sup>一作琴</sup>」 錢本校注「律髓作琴」

5 峭峭 鼓吹・禁臠・類苑・高麗本・朱鶴齡本・全唐詩「悄悄」

毛本「悄悄」<sup>一作峭峭</sup> 錢本「悄悄」を「峭峭」に改む 馮

浩本校注「一作悄悄。非」

厭厭 才調集・毛本「厭厭」

7 墻東 高麗本「東墻」

韻

下平二十四鹽（蟾・簾・織・厭）二十五添（嫌）同用

\*

朱鶴齡

7・8 陳啓源曰。東家王爲盧莫愁咏也。金堂。疑指盧家鬱金堂。朱彝尊

絕無題意。豈因語意大顯。故詭託之耶。○此批本題作水天閒話舊事。

何焯

〔讀書記〕一刻水天閒話舊事（評本）「統籤。此首一本題作天水（？）閒話舊事」。○按此篇賦當年貴主之事。而不可攷矣（評本篇を「必」に作る）。

〔評本〕月姊。嫦娥也。子夜歌。重簾持自隔。誰知許厚薄。○三四。虛虛實實。五六。起免嫌。言神女天孫。當如此也。○俞寬俞緊。風人謠諫之妙。○宋玉賦。東家之子登牆窺臣。唐人詩。王昌只在此牆東。

1 逗一逢字。卻反接隔。

2 生下二句。○簾是惟薄。

3・4 消息摹擬入微。

5 隔。

7 一句收出。

8 應轉逢字。

李義山七律集釋稿（四）

徐德泓

此確是擬豔之詞。非有所喻托者。其題因先有楚宮264絕句。故連而及也。前半。言相隔而想像之。第五六句。寫其無情。有漢廣江永之意。結語稍失風人之體。

陸鳴皋

暮雨二句。于無情中寫得極其流麗。正詩家筆妙處。

姚培謙

此以男女託諷君臣之際也。原本作楚宮二首。前首絕句。見卷十五。喻于寵者之無已。此首見無媒者之自傷。月姊曾逢。傾城遙隔。細腰纖指。髣髴難親。暮雨自歸。秋河不動。正楚詞所謂君可思而不可恃也。然際隔既久。嫌隙旋生。況王昌近在牆東。金堂豈免遭謗。貞臣誼士。惟有嘿嘿自喻而已。

屈復

已逢月姊。只隔重簾。雖未相親。而已知更覺。亦幾希也。五六。終未相親。然相去咫尺。安能免嫌。不如相親之爲愈也。有屈于不知已而伸于知己之恨。此結與武皇內傳分明在意同。

程夢星

此皆紅豆相思之曲也。前一首。悵望其不得頻見。後一首。籌計其終必相見。文人薄倖。不必有其事。不妨有其詞。

紀昀

〔詩說下〕何以不取楚宮二首也。曰。前一首。寫不見之感。乃從對面加一倍寫出。極有思致。然終覺是刻意做來。乏自然深遠之味。

第二首。直是無題之屬。誤列於楚宮下耳。○問第二首末二句。如何解。曰。譏刺之語也。言隔簾不見。徒想像其腰細指纖。惟有失望而歸。悵悵中夜耳。況彼東家。自有王昌。爲所屬意焉。有及我之理耶。分明言其及亂。而但以爲不免于嫌。則詩人忠厚之詞也。○問月姊曾逢下彩蟾一首。別本題爲水天閒話舊事。如何。曰。詩與楚宮不相應。此題有理。

〔評本〕前一首。借惝恍之感。次首。乃他詩誤入此題下。才調集題曰水天閒話舊事。當有所本。○重簾相隔。惟以佩響絃聲。想像腰細指纖。是相逢而終不見。惟有失望而歸。悵悵中夜耳。況彼東家。自有王昌。爲所屬意。豈復有分及我耶。不曰及亂。而曰不免于嫌疑。詩人忠厚之詞也。此寓言遇合之作。

〔律髓刊誤〕通首從次句生出。○不曰及亂。而曰免嫌。忠厚之旨。馮浩

4 楊(守智)曰。摹擬入細。

5·6 神味勝上聯。

7·8 何曰。後漢書逸民(逢萌)傳。平原王君公。儉牛自隱。時人謂之曰。避世牆東王君公。(中略)按。謂近在牆東。嫌疑難免。不我肯即。徒枉然耳。與隔重簾緊應。何氏引王君公。以牆東字相牽耳。其實牆東猶曰東家。何可據以強合。王昌必非其人。總不如闕疑也。互詳代應222七絕。

張采田

〔會箋〕舊本皆連楚宮作二首。今從才調集選。箋曰。馮氏謂七絕

託意未明。要異於七律之用意。是也。案此或係豔情。

〔辨正〕集中楚宮詩數首。惟過楚宮318一絕。似大中二年蜀遊時失意之作。此與復壁交青瑣篇54。均不得其寄託所在。未敢強解。馮氏謂皆開成五年江鄉之遊。寓意所歎。爲楊嗣復而發。不知燕臺事。與嗣復無涉。集未嘗爲嗣復別有詩也。至此後一首。當從才調集題爲水天閒話舊事。蓋暗比所思之人。或友人有所戀。暗指此事。與戲贈同旨。無庸穿鑿。此本合爲一題。不類甚矣。然二首均不詳爲何年所賦也。

郝天挺

1 月姊。謂嫦娥也。

7·8 詩意以桓嘉尙主。故用金堂事。言雖富之極。終不免王昌家之嫌疑也。

廖文炳

此詩專言富豪家之氣象也。首言富家所貯佳人。皆如月中嫦娥之美。其傾城之貌。隔于重簾。人所罕見。但聽環珮之響。已知細腰。辨琴瑟之彈。屯覺纖指耳。上皆形容其妓女之娉婷。故於方樂之時。如在巫山悄寂之景。既樂之後。適當秋河長夜之時。然是侈奢。金玉爲堂。雖自信其可。若使王昌清節之士在東隣。見之必斥其非。豈能免其嫌哉。

2 傾城國。言厭一城一國之人無有似其美也。消息。聲音也。

王清臣·陸貽典

此言貴家之姬。美如月姊自彩蟾而下。重簾相隔。不可得見。但聞

環珮之響。已知腰細。辨琴瑟之聲。尤覺指纖耳。若其既去之後。暮雨自歸。巫山悄悄。秋河不動。靜夜厭厭。恨美人兮寂寞。隔東牆以相窺。雖處金堂錢室之中。而暫時下來。重簾相隔。終未必得免嫌疑也。義山爲人。時稱其詭薄無行。故爲當塗所薄。末二句。當是諠浪之詞。如依郝注（郝天挺は襄陽耆舊傳に見える東平相散騎常侍王昌の家法嚴重の話を引く）。又是莊語矣。校與前三聯豔羨稱美之旨不合。且古詞云。十五嫁王昌。盈盈出畫堂。郝注所引。或非其倫歟。

馮舒・馮班

0 鈍云。此題集本誤也。

1 默云。俱說舊事。

程湘衡（才調集補註引）

疑主家有安樂太平之行。故云爾。

胡以梅（豔情類）

此直賦其豔情之詞也。言月姊曾經下蟾相逢。今相顧消息。隔在重簾之內。但聞珮響絃聲。想像其腰細指纖之妙耳。從行暮雨。而神女言歸。山亦爲之悄悄寂寥。繼望秋河。而知天孫不渡。祇覺厭厭其夜長乎。但恐置身如王昌在莫愁東家金堂之畔。動他人之嫌。不能永洽歡情也。通身剝皮剔骨。用事展情。出入化境。天隨子所謂暴天物。抉摘刻露。天能致罰。蓋此等題。此等詩歟。按逢字。鼓吹作聞。然推第五句。則是逢而非聞。寰宇記。楚宮在巫山縣西二百步。陽臺古城即襄王所遊之地。此命題。要知是假借。托巫山

神女以咏其事。本集二首。其一264日。（正文略）詳詩意。二三是沈惑其處矣。故有金堂之嫌。以自警耶。（中略）蘇東坡詩。應逐嫦娥罵老蟾。今詩謂下彩蟾。言月姊乘蟾而下也。（中略）今言傾城消息。是一顧再顧之意。淮南子。烏鵲填河成橋而渡織女。今言秋河不動。蓋無填之者也。

范曄

想像高唐格。楚宮（正文略）初聯。言曾逢。又言重簾。蓋彷彿音塵之意也。二聯三聯。是才情。落聯。述王昌故事。其意深矣。

近代注釋

〔鈴木虎雄〕七五頁。〔山之内正彦〕九二頁。

\* \*

0 底本ほか大多數のテキストは本詩を連作の第二首とするが、叢刊本および稿本は逆に七律、七絶の順に排列する。馮浩および張采田（會箋）は二首を連作とみとめず、胡震亨に従い、本詩標題を水天閒話舊事と改める。馮浩本七絶の題下注にいう。「諸集本皆作楚宮二首。才調集選下首。題作水天閒話舊事。今玩七絶。託意未明。要異於七律之用意。戊籤已従才調集分編。故亦従之。」胡震亨以下の改題説は、詩題に正文との關連をみとめがたいとするためだろう。だが、まず「水天」の意味が不明（山之内）だし、また「かかる祕事を何人と閒話せんとするか」（鈴木）甚だ疑問であり、才調集本が重視さるべきなのはむしろだが、改題によって作品理解はむしろ一層困難になるように思われる。いま底



本のままでよむ。

**楚宮** 〔左傳襄公三十一年〕公作楚宮（杜注 適楚。好其宮。歸而作之。穆叔曰。：君欲楚也夫。故作其宮。若不復適楚。必死是宮也。六月。辛巳。公薨于楚宮。〔玉臺新詠八蕭子顯日出東南隅行〕逶迤梁家誓。冉冉楚宮腰。〔李白在水軍宴觀妓詩〕行雲且莫去。留醉楚王宮。〔杜甫江雨有懷鄭典設詩〕春雨閨閣寒峽中。早晚來自楚王宮（九家注 趙云。楚王宮。指言高唐也。〔又詠懷古蹟五首之二〕搖落深知宋玉悲。風流儒雅亦吾師。：江山故宅空文藻。雲雨荒臺豈夢思。最是楚宮俱泯滅。舟人指點到今疑。舊注

は〔太平實字記一四八山南東道夔州巫山縣〕楚宮。在縣西北二百步。在陽臺古城內。即襄王所遊之地。を引くが、杜詩にすでに「俱泯滅」というように、必ずしも現實の古蹟を想定しない方がいい。半ば傳説の闇に閉される、そのかみの贅美を盡した楚王の高唐宮——第一首の七絶の2句参照。

唐詩類苑は義山の二作のほか、張籍の楚宮行（古詩）、許渾の楚宮怨二首（七絶）を載せるが、張の作は章華宮を歌う。

1 月姊 〔春秋感精符〕人主日月同明。四時合信。故父天母地。

兄日姊月（宋均注曰。父天於圜丘之祀也。母地於方澤之祭也。兄日於東郊。姊月於西郊）（後漢書李固傳注。〔獨斷上〕天子父事天。母事地。兄事日。姊事月。義山の詩にはまた〔聖女祠326〕星娥一去後。月姊更來無。〔檀花二首之一74〕月裏寧無姊。雲中亦有君。等があるが、他に月姊と熟した例は未見。なお月姊に對す

る日兄は〔補編一爲滎陽公至湖南賀聽政表〕日兄裏義。丘嫂延恩。〔劉禹錫公主下嫁詩〕天母親調粉。日兄憐賜花。

**彩蟾** 〔月夜重寄宋華陽姊妹381〕偷桃窃藥事難兼。十二城中鎖彩蟾。これも義山以外に用例未見。〔事類賦〕顧兔騰精而夜逸。蟾蜍綯彩而宵奔。と見えるので、より古い典據があるか。

嫦娥が蟾蜍に變身した話は〔淮南子覽冥訓佚文〕託身於月。是爲蟾蜍。而爲月精（初學記一）。

2 〔范靜婦登樓曲〕相思隔重嶺。相憶限一作恨長河。〔元稹爭詩〕莫愁私地愛王昌。夜夜箏聲怨隔牆。

**傾城** 北齊二首之二27注（七絶集釋稿一）本學報五〇冊四七四頁 参照。

**消息** ここは相手の動靜か。〔後漢書獨行陸續傳〕續：詣洛陽詔獄就考。：續母遠至京師。覲候消息。獄事特急。無緣與續相聞。〔杜甫送路六侍御入朝詩〕童稚情親四十年。中間消息兩茫然。九日503注（集釋稿三）本學報五六冊三五五頁 参照。

**隔重簾** 〔子夜歌四十二首之三十一〕念愛情懷慊。傾倒無所惜。

重簾持自郤。誰知許厚薄。〔柳中庸幽院早春詩〕隔簾春雨細。高枕曉鶯長（御覽詩）。〔梁鍾戲贈歌者詩〕楚妃臨扇學。盧女隔簾傳（御覽詩）。

3・4 〔徐陵玉臺新詠集序〕楚王宮裏。無不推其細腰。衛國佳人。俱言訝其戲手。〔白樂天和夢遊春詩〕漸聞玉珮響。始辨珠履躑。已と更との對應は、義山の七律であと四例。〔贈劉司戶黃21〕

已斷燕鴻初起勢。更驚騷客後歸魂。〔無題四首之一114〕劉郎已恨蓬山遠。更隔蓬山一萬重。〔寫意392〕三年已制思鄉淚。更入新年恐不禁。〔贈趙協律哲476〕已叨鄒馬聲華末。更共劉盧族望通。より早くには〔劉希夷代悲白頭翁詩〕已見松柏摧爲薪。更聞桑田變成海。〔杜甫卜居詩〕已知出郭少塵事。更有澄江銷吾愁。

3 聞響 〔玉臺新詠四謝朓夜聽妓二首之一〕瓊閨劍響聞。瑤席芳塵滿。〔又九蕭子顯春別四首之二〕爭風競日常聞響。重花疊葉不通飛。

珮響 〔文選四九范曄後漢書皇后紀論〕居有保阿之訓。動有環珮之響。〔杜甫雨三首之一〕楚宮久已滅。幽珮爲誰哀。侍臣書王夢。賦有冠古才。〔九家注〕趙云。幽珮。以雨聲如珮。此神女珮也。

腰細 〔梁元帝蕩婦秋思賦〕蕩子之別十年。倡婦之居自憐。坐視帶長。轉看腰細。ここでは徐陵の文および題注に引いた蕭子顯の詩にいう「楚宮腰」をさす。〔許渾楚宮怨二首之一〕細腰爭舞君沈醉。白日秦兵天上來。義山詩に頻出。〔碧瓦79〕無雙漢殿鬢。第一楚宮腰。〔效徐陵體贈更衣379〕楚腰知便寵。宮眉正闢強。〔柳499〕潮岸已攀行客手。楚宮先聘舞姬腰。など。

4 辨聲 〔楊炯少室山少姨廟碑銘序〕高陽有飛龍之樂。始會八風。帝舜有儀鳳之音。初調九奏。后變典其教。制氏辨其聲。鐘磬笙竿致其和。尊卑長幼成其序。

絃聲 〔古詩十九首之五〕上有絃歌聲。音響一何悲。〔李注〕論

語曰。子游爲武城宰。聞絃歌之聲。〔玉臺新詠五何遜日夕望江贈魚司馬詩〕管聲已流悅。弦聲復悽切。

指纖 〔文選一八嵇康琴賦〕飛纖指。以馳驚。〔玉臺新詠五何子朗學謝體詩〕思君擊促柱。玉指何纖纖。

5 暮雨 〔文選一九宋玉高唐賦〕妾在巫山之陽。高丘之阻。旦爲朝雲。暮爲行雨。朝朝暮暮。陽臺之下。〔范雲巫山高詩〕靄靄朝雲去。冥冥暮雨歸。巖懸獸無跡。林暗鳥疑飛。枕席竟誰薦。相望徒依依。

峭峭 〔楚辭九章悲回風〕上高巖之峭岸兮。〔王逸注〕升彼山石之峻峭也。處雌蜺之標顯。〔文選二九張協雜詩十首之九〕荒庭寂以閑。幽岫峭且深。〔劉蛻文冢銘序〕累疊爲塚。則汲之兆乎。峭峭爲壁。則魯之兆乎。ただし劉は大中四年の進士〔登科記考二二〕で、杜牧に劉蛻除壽州巡官制〔大中元あるいは二年の作〕があり、義山の用例よりも遅い可能性が大きい。

6 秋河 〔文選二六謝朓暫使下都詩〕秋河曙耿耿。寒渚夜蒼蒼。〔李注〕秋河。天漢也。〔歐陽旦賦得秋河耿耿詩〕月沒天欲明。秋河尙凝白。

動 〔李頻秋宿慈恩寺遂上人院詩〕風高斜漢動。葉下曲江寒。

厭厭 〔詩小雅湛露〕湛湛露斯。匪陽不晞。厭厭夜飲。不醉無歸。〔毛傳〕厭厭。安也。夜飲。私燕也。〔爾雅釋訓〕厭厭媿媿。安也。〔郭注〕皆好人安祥之容。〔陶淵明和郭主簿詩二首之二〕衡觴念幽人。千載撫爾訣。檢素不獲展。厭厭竟良月。〔白樂天不如

來飲酒七首之一」不如來飲酒。相對卒厭厭。

7 王昌〔碧雞漫志二〕古書亡逸固多。存世者亦恨不盡見。李義山絕句（代應）云。本來銀漢是紅牆。隔得盧家白玉堂。誰與王昌報消息。盡知三十六鴛鴦。而唐人使王昌事尤數。世多不曉。古樂府中可互見。然亦不詳曰。一曰。相逢峽路間。道隘不容車。如何兩少年。挾轂問君家。君家誠易知。易知復難忘。黃金爲君門。白玉爲君堂。堂上置樽酒。使作邯鄲倡。中庭生桂樹。華燈何煌煌。兄弟兩三人。中子爲侍郎。五日一來歸。道上自生光。黃金絡馬頭。觀者滿路傍。入門時左顧。但見雙鴛鴦。鴛鴦七十二。羅列自成行。一曰。河中之水向東流。洛陽女兒名莫愁。莫愁十三能織綺。十四採桑南陌頭。十五嫁爲盧家婦。十六生兒字阿侯。盧家蘭室桂爲梁。中有鬱金蘇合香。…人生富貴何所望。恨不嫁與東家王。以三章互考之。即知樂府前篇所謂白玉堂與鴛鴦七十二。乃盧家。然義山稱三十六者。三十六雙。卽七十二也。又知樂府後篇所謂東家王。卽王昌也。余少年時。戲作清平樂曲。贈妓盧姓者云。盧家白玉爲堂。于飛多少鴛鴦。縱使東牆隔斷。莫愁應念王昌。黃載萬亦有漏子曲云。憐宋玉。許王昌。東西鄰短牆。予每戲謂人曰。載萬似曾經界兩家來。蓋宋玉好色賦。稱東鄰之子。卽宋玉爲西鄰也。東家王。卽東鄰也。載萬用事。如此之工。…又韓致光（畫寢）詩。何必苦勞魂與夢。王昌祇在此牆東。…李義山云。王昌且在牆東住。未必金堂得免嫌。又（春日103）云。欲入盧家白玉堂。新春催破舞衣裳。對雪155云。又入盧家妒玉堂。

韓偓および2句の注に引いた元稹の作のほか、唐詩の用例をで  
きるかぎり拾ってみると、「上官儀和太尉戲贈高陽公詩」南國自  
然勝掌上。東家復是憶王昌。「喬知之和李侍郎古意詩」自矜夫婿  
勝王昌。三十曾作侍中郎。「王維雜詩」王昌是東舍。宋玉次西家。  
小小能織綺。時時出浣紗。親勞使君問。南陌駐香車。「崔顥王家  
少婦<sup>一作古意</sup>十五嫁王昌。盈盈入畫堂。自矜年最少。復倚墻爲郎。  
〔劉禹錫酬令狐相公春日言懷見寄詩〕前陪看花處。鄰里近王昌。  
〔魚玄機贈鄰女詩〕易求無價寶。難得有心郎。…自能窺宋玉。何  
必恨王昌。〔唐彥謙離鸞詩〕聞道離鸞思故鄉。也知情願嫁王昌。  
また義山の文に一例〔文集四上河東公啓〕窺西家之宋玉。恨東家  
之王昌。王昌の故事は、北宋ですでに傳承が絶えていたらしいが、  
かれは唐代では知られた業平的人物であったか。〔國史補上崔顥  
見李邕條〕崔顥有美名。李邕欲一見。開館待之。及顥至獻文。首  
章曰。十五嫁王昌。邕叱起曰。小子無禮。乃不接之。

墻東 塀の東となりといえは東家王すなわち王昌。字面として  
近いのは〔孟子告子下〕踰東家牆而摟處子。則得妻。不摟。則不  
得妻。則將摟之乎。〔文選一九宋玉登徒子好色賦〕臣里之美者。  
莫若臣東家之子。…然此女登牆闚臣三年。至今未許也。しかしこ  
れでは西どなりに男がいることになる。

8 金堂 朱注に引く陳啓源の説のように鬱金堂をさすと思われる。  
〔沈佺期古意呈補闕喬知之詩〕盧家少婦鬱金堂<sup>一作香</sup>。海燕雙棲玳  
瑁梁。文字通り黄金の堂屋の意味としては〔古歌〕上金殿。著玉

樽。延貴客。入金門。入金門。上金堂（古詩紀一七・漢樂府古辭。

注記にいう、已下皆古歌辭。雜見諸書。今采附於此。〔晉書八〇許邁傳〕玄遺王羲之書云。自山南至臨安。多有金堂玉室。

免嫌

〔君子行〕君子防未然。不處嫌疑間。瓜田不納履。李下不正冠。嫂叔不親授。長幼不比肩。〔李白長干行二首之一〕同居長千里。兩小無嫌猜。〔孟郊雪詩〕書之與君子。庶免生嫌猜。〔姚合和座主相公西亭秋日即事詩〕屬和才雖淺。題高免客嫌。

\* \* \*

1 お月さま姉さん——絢爛たる色彩のガマの住む世界からこの地上に降り立ったその時に、（わたしは）出會ったのだった。詩人としての義山が技巧を凝らすのは、必ずしも個々の語彙の段階ではないと思われるが、月姉・彩蟾は或いはかれの造語か。ガマに乗って來たと解する胡以梅説はおかしい。彩蟾より下った月姉がいかなる女性であつたか。公主から女仙、遊女までどのような想定できるが（一例をあげれば月夜重寄詩の宋華陽姊妹）、ここでも讀者に唯一の正解を得させるようには書かれていない。鼓吹本が「逢」と「聞」に作るのは非（胡以梅）。

2 元稹の作、さらに義山自身の「代應」を合わせてみると、ここですでに王昌を連想できよう。幾重にもかさなる簾は即ち男女を隔てるものの象徴で、簾は韻字でもありスダレそのものにこだわらず、牆に置換可能。城でも國でも顛覆破滅させんばかりの美人から、いまは嚴重にへだてられ、僅かに洩れ承るのはその動靜ば

かり。

3・4 楚王のもとに現れた巫山の神女かとまがわんばかり（杜詩）の珮玉のひびきを耳にして、楚の宮女ばりのあの細腰がしかと認知されるし、さらに彈奏される（箏の）絃の音に耳をそばだて（辨は辨析・審定、聞とはやや異なる）、あの白魚の指をまざまざ感覺する。舊注は2句の消息の内容を直接3・4句に結びつける。やや不安が残るが一應それに従う。鈴木説は全體として最も明快だが、2句は「今簾を隔て消息なきをいふ。三・四は女姿を想像す。」とあり、二者の關係についてはややあいまいである。

5・6 暮夜、夢かうつつのうちに巫山の神女とひとしく雨となつて會いに來た、かと思つたが、こちらの氣など知らぬげに冷く歸つてしまひ、かなたには山の絶壁がそそり立つばかり。一雨去つたあとには、男女の隔ての壁——本來銀漢是紅牆——秋の天河が小ゆるぎもせず、そして夜はこともなくただ平和に更けてゆく。厭厭は、内心の憂悶を強いて抑えた陶詩の含意に通ずる。「問題と研究」（七十六年十一月）野口一雄「柳永の詞に見える〈厭厭〉の解釋について」参照。峭峭を悄悄に作るテキストは、錢謙益や馮浩に従ひ、とらない。この一連を男の失意のさととみるのは諸注一致する。ただし女と會つたのか否かは不分明。鈴木説では、「相會する能はずして夜深に及ぶをいふ。」

7・8 でも王昌はいまともかく隔ての屏の東隣りに住んでいる。そのかぎりでは、うこんの薰きこめられたあの堂屋の方々、美女

の身内から疑いの目で見られずにはすまないのだ。紀昀をのぞき諸説みな王昌はわたしだとする。わたしはたしかに本詩の主人公だろうが、すなわち作者自身とはかぎらない。

姚培謙が寄托ありといい、屈復および紀・馮が未詳のほか、諸家おおむね純粹の豔詩とみとめ、胡以梅・鈴木は作者自述、何焯・徐德泓・程夢星・張采田・廖文炳・程湘衡らは客觀敘述。自述としても通ずるが、本詩と内容的に最も関連度の高い作品の詩題「代應」を考慮するならば、このばあいもやはり「擬豔」（徐德泓）の詩とみなすのが穩當か。馮浩、張采田、安徽師大年表いずれも不編年。

（荒井 健）

作堂」

4 自 統籤「是」

韻

上平八微（微・歸・稀）獨用

\*

何焯

「評本」

4 言外見獨於賢才不然耳。

姚培謙

見千寵者之無已也。

屈復

人間之久別。恨更何如。

程夢星（七〇五頁參照）

紀昀（七〇五頁參照）

張采田（七〇六頁參照）

\*

\*

楚宮二首之一<sup>264</sup> 楚宮（付載）

十二峯頭落照微 十二峯頭 落照微なり

2 高唐宮暗坐迷歸 高唐宮暗く 坐に歸るに迷う

朝雲暮雨長相接 朝雲暮雨 長に相接するに

4 猶自君王恨見稀 猶自君王 見ること稀なるを恨む

校

0 萬首絕句七言四一・唐詩類苑一五五（居處部宮類）

1 頭 底本および高麗本以外はすべて「前」

2 唐 錢寫本「唐」を「堂」に改む 朱鶴齡本・全唐詩校注「一

0 楚宮、楚王（襄王）、さらには宋玉等一連の故事は、義山偏愛

のテーマで、本詩と同題の複壁交青瑣54・湘波如淚277のほか、夢

澤62（七絕集釋稿（本學報五一冊五八八頁）・岳陽樓95・席上作

135（席上贈人510）・楚吟289・深宮280・有感311・過楚宮318等に歌わ

れるが、特に関連ある二作を引く。

非關宋玉有微詞。却是襄王夢覺遲。一自高唐賦成後。楚天雲雨

盡堪疑（有感）。

巫峽迢迢舊楚宮。至今雲雨暗丹楓。微生盡戀人間樂。只有襄王憶夢中（過楚宮）。

## 1 十二峯

〔喬知之巫山高詩〕巫山十二峯。參差互隱見。以下唐代では同題の樂府に頻見、樂府詩集一七參照。また〔許渾楚宮怨二首之一〕十二山晴花盡開。楚宮雙闕對陽臺。十二峯に名稱が付されるのはより遅れるか。〔隱居通議二九川江圖條〕今黃德英示以蜀江圖一卷。廣踰半尺。長四丈餘。：謾記大略。以見汴蜀之艱險云。：又進即歸州。治江南。有巫峽。有楚王樓。有巫山十二峯。有宋玉亭。皆南岸也。〔又十二峯名條〕巫山十二峯。口習耳聞。熟矣。終未悉其何名。今因蜀江圖所載。始得其詳。曰獨秀。曰筆峯。曰集仙。曰起雲。曰登龍。曰望霞。曰聚鶴。曰棲鳳。曰翠屏。曰盤龍。曰松蠻。曰仙人。：山在歸州。乃川江之南岸。見者謂十二峯元不聯屬。往往懸隔相望。若欲觀玩。惟溯流入蜀者甚便。儼順流而東。則三峽水急如箭。不容寓目。所謂歸州淘米。峽州喫飯。可見其峻疾矣。

## 峯頭

〔爾雅釋山〕山頂。豕。峯者屢巖。〔郭注〕謂山峰頭巉巖。〔岑參首春渭西郊行呈藍田張二主簿詩〕秦女峰頭雪未盡。胡公陵上日初低。〔白居易齊雲樓晚望詩〕挿霧峯頭沒。穿霞日脚殘。

## 落照

〔劉孝綽和太子落日望水詩〕川原繚繞浮雲外。宮闕參差落照間。〔盧綸長望春望詩〕川原繚繞浮雲外。宮闕參差落照間。微〔文選二二謝靈運石壁精舍還湖中作〕出谷日尙早。入舟陽

已微〔李注〕鄭玄毛詩箋曰。微。不明也。〔趙嘏送李裴評事詩〕城臨戰壘黃雲晚。馬渡寒沙夕照微。

## 2 高唐

〔文選一九宋玉高唐賦〕昔者楚襄王與宋玉遊於雲夢之臺。望高唐之觀。：玉曰。昔者先王嘗遊高唐。怠而晝寢。夢見一婦人曰。妾巫山之女也。爲高唐之客。聞君遊高唐。願薦枕席。王因幸之。〔劉綸巫山高詩〕高唐與巫山。參差鬱相望。〔沈佺期巫山高二首之二〕神女向高唐。巫山下夕陽。

## 迷歸

〔劉方平巫山高詩〕陽臺歸路直。不畏向家迷。〔孟郊夢澤中行〕楚山爭蔽虧。日月無全輝。楚路饒迴惑。旅人有迷歸。

## 3 朝雲暮雨

〔文選二三阮籍詠懷十七首之十七〕三楚多秀士。朝雲進荒淫。〔費昶巫山高詩〕朝雲觸石起。暮雨潤羅衣。〔李白寄遠十二首之十二〕美人美人兮歸去來。莫作朝雲暮雨兮飛陽臺。

## 相接

〔禮記聘義〕敬讓也者。君子之所以相接也。故諸侯相接以敬讓。則不相侵陵。〔玉臺新詠二傅玄明月篇〕憂喜更相接。樂極自還悲。〔杜甫寄岑嘉州詩〕外江三峽且相接。斗酒新詩終自疎。〔溫庭筠雉鳴歌〕綠楊紅迹來相接。箭發銅牙傷彩毛。

## 4

(a) 君王ヲ恨ム。〔文選一六江淹恨賦〕望君王兮何期。終燕絕兮異域。〔李白邯鄲才人嫁爲厮養卒婦詩〕君王不可見。惆悵至明發。(b) 君王ガ恨ム。〔孟郊巫山高詩〕千載楚襄王。遺文宋玉言。

## 猶自

〔沈約初春詩〕草色猶自腓。林中都未有〔類聚三〕。〔劉孝綽春宵詩〕春宵猶自長。春心非一傷。句頭に來る例として〔柳宗元登柳州城樓寄漳汀封連四州詩〕共來百越文身地。猶自音書滯

一郷。こと類似的表現として義山に〔華嶽下題西王母廟350〕莫恨名姬中夜沒。君王猶自不長生。

君王 「虞羲巫山高詩」雲雨麗以佳。陽臺千里思。勿言可再得。特美君王意。高唐一斷絕。光陰不可遲。なお人欲13注（七絶集釋稿）本學報五〇冊四六三頁）参照。

見稀 「漢書九七上外戚薄姬傳」歲申生文帝。年八歲立爲代王。自有子後。希見。：薄姬以希見故。得出從子之代。（杜甫十二月一日三首之三）春來準擬聞懷久。老去親知見面稀。

1 巫山十二の峯々、そのいただきに夕映えの光かすかである。落照は夕日そのものでなく、返照。峯頭を峯前とすれば焦點がぼける。

2 巫山のふもとなる高唐の宮殿のあたりはすっかり暗く、いつのまにか道筋もさだかならず、歸るに歸れなくなってしまった。「歸」を高唐に歸ると解するのは非であろう。2句は、あやめも分かれ楚王の心をも表している。「唐」を「堂」に改める錢謙益本の意圖はよく分らない。

3・4 巫山の神女は、朝に雲となると續いてまた夕に雨となり、日ごと夜ごといつもお側に侍るのだが、それでもわが君さまは滅多に顔が見られない、と恨めしく思われるのだ。「相接」するのは雲雨と君王と、ともとれるが、先行例からすればやはり朝雲と暮雨となる。4句、舊注は姚培謙を始め「恨」の主體を神女と

するが、楚宮説話における襄王を義山がどのように描いているか（有感、過楚宮）を考え合せるならば、これも君王の感溺を強調するものと見るべきである。馮浩・張采田および安徽師大年表いずれも不編年。

（中島長文）

和友人戲贈二首之一266 友人の戲に贈るに和す

東望花樓會不同 東のかた花樓を望むも 會同じからず

西來雙燕信休通 西來の雙燕 信通すること休めよ

仙人掌冷三霄露 仙人掌冷かに 三霄の露

4 玉女窓虛五夜風 玉女窓虛しく 五夜の風

翠袖自隨迴雪轉 翠袖自ら迴雪に隨いて轉じ

燭房尋類外庭空 燭房尋いで外庭に類て空し

殷勤莫使清香透 殷勤に清香をして透せしむる莫れ

8 牢合金魚鎖桂叢 牢く金魚を合して 桂叢を鎖せ

校

0 文苑英華二四六（酬和類）・唐詩類苑一〇三（人部嘲戲類）

和友人戲贈 英華「和令狐八綯戲題<sup>集作和友</sup>人戲贈」高麗本「和令狐

綯戲贈」朱鶴齡本校注「英華作和令狐八戲題」

全唐詩校注「一作和令狐八戲題」

贈 錢本「題」を「贈」に改む

1 花樓會 英華「華樓事集作花樓會」

花 馮浩本校注「一作高」

會 錢本校注「會英華作事。五作子。一作午。轉作駐」 朱本

校注「英華作事」 全唐詩校注「一作事」 稿本旁注「事」

4 五 英華「午集作五」 統籤·毛本·全唐詩校注「一作午」 稿

本旁注「午」

5 轉 英華「駐集作轉」 稿本旁注「駐」 全唐詩校注「一作駐」

6 燭 英華「獨」

7 殷勤 英華「慇懃」

韻

上平一東（同·通·風·空·叢）獨用

\*

朱鶴齡

8 金魚。魚鑰也。

吳喬

0 英華作和令狐八戲題。

6 燭房。卽月殿。

朱彝尊

5 次第寫出寂寞光景。

7 透字。應作自內而出解。方與莫字相應。言徒亂人意也。

何焯

〔評本〕小馮云。不過獨處風寒露冷而已。著詞何等莊麗。

李義山七律集釋稿（四）

6 第六。未喻。

8 桂叢。指女之所憑。

徐德泓

此二首。似贈置姬別室者。故言此會不易。非比泛常。不可使有家信促還。蓋緣此地露冷風清。未可去耳。翠袖句。狀此際歡情飛舞之態。而終不能久留。故燭房句。言內室又旋空也。結謂局閉宜深。消息不可外露。歸到戲字意。

姚培謙

此爲有所歡而必欲遂之詞。一首言其間隔而不得通。二首言其不得通而必求一合也。花樓一會。芳信誰傳。仙人掌冷。玉女窗虛。全無顧盼留連之意。乃翠袖已去。燭房已空。而情癡者猶然不覺。猶恨金魚牢鎖之處。不能使一縷殷勤透入。所謂焦明已翔於寥廓。而羅者猶視乎藪澤也。

屈復

既不同會。信又不通。山窮水盡矣。三四。代愁孤冷。五六。我亦同此孤冷。此時欲通殷勤。使清香相透。忽想其金魚牢合。恐亦無益也。

程夢星

二詩必義山在長安而友人有幽會于關外者。故前首起句曰東望花樓西來燕信也。仙人四句。言已在長安寂寞之狀。插翠袖句。言雖有回雪之舞。與我總無與也。結句則囑彼長相歡會也。次首義亦與前首同。俱說自己。玩須爲且作。字義甚妙。言雖有此物。無由持贈



也。子夜二句。與前翠袖句同意。結言唯有啼怨而已。不如汝之共對熏爐也。

紀昀

〔詩說下〕何以不取和友人戲贈二首及題二首後重有戲贈任秀才也。曰。此却是無題之類。非豔詞也。于集中爲數見不鮮耳。

〔評本〕（七二〇頁參照）

馮浩

0 文苑英華作和令狐八綯戲題。當可據。故編此（馮浩本、本詩の上篇は令狐八拾遺見招送裴十四歸華州58）。

1・2 舊引開元遺事。任宗爲商於湘中。妻郭紹蘭自長安語梁間雙燕寄詩之事。非也。此二句。固不必用典。

4 此寫高樓之景。良會不同。言外可見。

8 金魚。魚鑰也。桂叢。指月殿。重門深鎖。母使他人得近。

張采田

〔會箋〕文苑英華作和令狐八綯戲題。當可據。○三首豔情。不待言矣。余疑義山登第。同時子直於戚里中必有議婚之慾。前二首答綯。即相如消渴之意。義山情殷求偶。於此可見。後一首則妬任之先我而聘也。此所以轉而歎羨王氏歟。非尋常狎邪比。雖屬臆測。庶爲近之。

近代注釋

〔森槐南〕上卷三六四頁。〔山之内正彦〕一一九頁。

\* \*

0 義山が令狐綯に與えた作は集本詩題によれば八首。うち一首寄令狐郎中69は七絕集釋稿（本學報五二冊五九七頁參照。英華のテキストにもとづけば本篇以下267 268二首を加え計十一首となる。

戲贈 既出。六九六頁。英華本の戲題ならば（續高僧傳八隋曇延傳）有薛居士者。遂從而謁焉。言譁相高。未之揖謝。薛乃戲題四字。謂方圓動靜。延應聲曰。方如方等城。圓如智慧日。動則沒波浪。靜類涅槃室（正藏五〇卷四八八頁上）張說に「戲題草樹」詩あり。孟浩然にも「戲題」の五絶あり。

1 東望 〔文選〕二九張衡四愁詩「我所思兮在太山。欲往從之梁父艱。側身東望涕霑翰。〔玉臺新詠五沈約有所思樂府〕四征登隴首。東望不見家。〔杜甫江畔獨步尋花七絕句之四〕東望少城花滿煙。百花高樓更可憐。義山にまた〔海上344〕石橋東望海連天。徐福空來不得仙。

花樓 〔白樂天東南行一百韻〕柏殿行陪宴。花樓走看輔。〔陳標長安秋思詩〕金刀玉指裁縫促。水殿花樓弦管長。〔李賀秦王飲酒詩〕花樓玉鳳聲嬌嬈。海綯紅文香淺清。黃娥跳舞千年魘。

華樓ならば〔文選五左思吳都賦〕飛雲蓋海。制非常模。疊華樓而島峙。時髣髴於方壺（劉淵林注 飛雲蓋海。吳樓船之有名者。皆彫鏤采畫。有軒橫華檻之船也）。

2 〔玉臺新詠四鮑令暉古意贈今人詩〕誰爲道辛苦。寄情雙飛燕。〔文選三一江淹雜體詩李都尉〕袖中有短書。願寄雙飛燕（李注 虞羲送別詩曰。唯有一字書。寄之南飛燕）。

西來〔李白古有所思詩〕西來青鳥東飛去。願寄一書謝麻姑。

〔杜甫奉酬薛十二丈判官見贈詩〕西來有好鳥。爲我下青冥。

雙燕 (1)鳥のツバメ。〔古詩十九首之十二〕思爲雙飛燕。銜泥

巢君屋。〔玉臺新詠四詠燕〕雙燕戲雲崖。羽翮始差池。〔劉孝綽奉

和湘東王應令二首春宵〕誰能對雙燕。暝暝守空牀。〔李白雙燕離

詩〕雙燕復雙燕。雙飛令人羨。 (2)かんざしのツバメ。〔李白白頭

吟〕頭上玉燕釵。是妾嫁時物。義山の「聖女祠」249 寄問釵頭雙白

燕。每朝珠館幾時歸。洞冥記卷二に見える玉燕釵の話にもとづく。

無題四首之三116釵上燕の注〔集釋稿〕本學報五三册六三八頁〕參

照。

信休通 〔晉書四三王澄傳〕〔王敦〕因下牀而謂澄曰。何與杜

駿通信。澄曰。事自可驗。

3 〔漢書二五上郊祀志〕〔武帝〕其後又作柏梁銅柱承露仙人掌之

屬矣〔蘇林曰。仙人以手掌擎盤承甘露。師古曰。三輔故事云。建

章宮承露盤高二十丈。大七圍。以銅爲之。上有仙人掌承露。和玉

屑飲之。蓋張衡西京賦所云。立修莖之仙掌。承雲表之清露。屑瓊

蕊以朝餐。必性命之可度也。〔文選一班固西都賦〕抗仙掌以承露。

擢雙立之金莖。軼埃竭之混濁。鮮顚氣之清英。

三霄 用例未見。〔朱鶴齡注引道源注〕三霄。神霄。玉霄。太

霄也。

4 玉女窓 〔文選一一王延壽魯靈光殿賦〕神仙岳岳於棟間。玉女

闌窓而下視〔張載注〕神女之人。又彌高也。△李善注▽李尤函谷

李義山七律集釋稿(四)

關銘曰。玉女流眄而下視。〔庾信哀江南賦〕倚弓於玉女窓扉。繫

馬於鳳凰樓柱。〔宋之問奉和幸薦福寺詩〕殿飾金人影。窓搖玉女

扉。〔溫庭筠西掖謁所知詩〕赤墀高閣自從容。玉女窓扉報曙鐘。

玉女は仙女と同義。また固有名詞となることもある。〔楚辭惜

誓〕建日月以爲蓋兮。載玉女於後車。〔曹植遠遊篇〕靈龜戴方丈。

神嶽儼嵯峨。仙人翔其阿。玉女戲其阿。〔漢武內傳〕我壻宮玉女

王子登也。向爲西王母所使。從崑山來。〔又〕帝因問上元夫人由

王母曰。是三天上元之官。統領十方玉女之名錄者也。

五夜風 〔文選五六陸倕新刻漏銘〕且今之官漏。出自會稽。積

水違方。導流乖則。六日無辨。五夜不分〔李注〕衛宏漢舊儀曰。

夜漏起。省中用火。中黃門持。五夜。甲夜乙夜丙夜丁夜戊夜也。

〔李頎寄盧司勳員外詩〕歸鴻欲度千門雪。侍女新添五夜香。〔劉禹

錫始聞秋風詩〕五夜聽颺枕節覺。一年顏狀鏡中來。〔王建宮詞〕樹

頭樹底覓殘紅。一片西飛一片東。自是桃花貪結子。錯教人恨五更風。

5 翠袖 〔杜甫佳人詩〕天寒翠袖薄。日暮倚修竹。

迴雪 〔張衡舞賦〕連翩駘驪。乍續乍絕。裾似飛燕。袖如迴雪。

〔文選一九曹植洛神賦〕其形也。：髣髴兮若輕雲之蔽月。飄飄兮

若流風之迴雪。〔顧況舞詩〕落花遶樹疑無影。迴雪從風暗有情。

義山にまた〔酬崔八早梅有贈兼示之作190〕謝郎衣袖初飄雪。荀令

薰爐更換香。〔歌舞343〕迴雲歌響清。迴雪舞腰輕。

6 燭房 〔文選一一三謝莊月賦〕君王廼默晨懼。樂宵宴。收妙舞。

弛清縣。去燭房。卽月殿。芳酒登。鳴琴薦。義山にいま一例、

〔昨夜335〕不辭鷓鴣年妬芳。但惜流塵暗燭房。

尋 〔留贈畏之三首之一146〕中禁詞臣尋引領。左川歸客自迴腸。と同様、助字辨略卷二の旋也、隨也、の訓でよい。徐德泓參照。

外庭 用例未見。

7 殷勤 〔無題150〕注參照、集釋稿(一)本學報五三册六四七頁。

清香 〔謝靈運山居賦〕播綠葉之鬱茂。含紅敷之續飄。怨清香之難留。矜盛容之易闌。必充給而後寧。豈蕙草之空殘。〔玉臺新詠四謝朓夜聽妓詩〕蛾眉已共笑。清香復入檢。〔元稹解秋十首之五〕露簾有微潤。清香時暗焚。次の義山の用例はことと關連するか。〔大鹵平後書懷十韻556〕逸志忘鴻鵠。清香披蕙蘭。

8 牢合 用例未見。〔釋名釋宮室〕獄又謂之牢。言所在堅牢也。

〔白樂天鸚鵡詩〕應似朱門歌舞妓。深藏牢閉後房中。

金魚 朱注にいうように魚鱗であらう。義山になお一例、〔燕臺詩四首之三秋544〕金魚鎖斷紅桂春。古時塵滿鴛鴦茵。ただし義山以前の用例未見。〔和凝宮詞百首之九十七〕曉光滿院金魚冷。紅藥花擎宿露飛。

〔梁簡文帝秋閨夜思詩〕夕門掩魚鱗。宵牀悲畫屏。

桂叢 〔楚辭招隱士〕桂樹叢生兮山之幽。偃蹇連蜷兮枝相繚。

〔庾肩吾芝草詩〕蜘蛛玩芝草。淹留樊桂叢。桂叢方偃蹇。芝葉正玲瓏。〔劉綏奉和玄圃納涼詩〕樵嶼動蘭室。神飆起桂叢。〔李白送溫處士歸舊居詩〕去去陵陽東。行行芳桂叢。

\* \* \*

「戲贈」された當人を、程夢星および張采田は義山自身とみなすが、英華の詩題によるならば、「友人」(「令狐綯」から「任秀才」(本連作に續く「題二首後268」の主人公)への戲贈とせねばならない。

A 人の豔福をやつかむ詩——徐德泓・程・張

B 人の痴情を嘲弄する詩——姚培謙・屈復・馮浩

C 無題詩同様寓意ある詩——紀昀

いまB説をとる。「男が、青樓中の美人に眷戀」して「私かに之に入れ揚げて居つたのを」「素破抜」いた戲詩「に和して、一層、皮肉を言つたもの」という森槐南の狀況説明でよいだろう。おそらく、宴席もしくはそれと類似の場で詠まれたものだろうし、義山自身が二人の男女の事實關係をどの程度知っていたか、作品にどの程度フィクションが入っているかなど、一切不明である。また、本篇以下の三首は、いかにも遊里文學的情緒がただよい、張氏のように義山の配偶者探しを云々するのは見當違いとしか思われない。

1・2 東のかた花に埋もれる美しい樓閣を見やるばかりで、二人一緒に楽しむこともない。西から並んで飛び来るつがいの燕も、戀の便りを届ける御用がない。雙燕は鴛鴦同様男女和合の象徴であり、青鳥同様文の使いでもある。さらに例の女のかんざしの連想があるかもしれない。英華本は、花樓を華樓に作るが、文選をふまえる語ならば、ここでは非。以下英華の異文はいずれも不適

當。

3・4 金銅仙人が掌にささげ持つ盤は遙かな天上界の露を受けて冷たく、仙界の女性・玉女の姿の雕られた豪華な窓邊に、夜明けの空が虚しく吹き渡るばかり。男性の心象風景。眼目は「冷」と「虚」の字。姚氏の説参照。

5・6 女の翠の袖はまるで舞い上る雪のように自由自在に飄っていたが、燭の光まばゆい室内もいつしか人氣なく外庭同様になつてしまった。女の部屋と女の不在のさま、と一應解しておく。外庭は未詳。あるいは前庭ないし後庭をさすか。

7・8 この一連は、女へ直接の訴えかけとし、また清香は他の男の暗喩、透は透入（姚氏・屈氏）とみなす。どうかくれぐれも清らかな香——色男を中にまぎれこまさぬよう。黄金の魚の錠前を固く固くかけ、桂樹の木立——女の園をしかと閉しておいて欲しい。

係年は令狐綯との關係を根據に、馮浩は開成元年（八三六）、張采田および安徽師大年表は開成二年とする。

（中原健二）

和友人戲贈二首之二 267 友人の戲に贈るに和す

迢遞青門有幾關 迢遞たる青門 幾關か有る

柳梢樓角見南山 柳梢樓角 南山を見る

李義山七律集釋稿（四）

明珠可貫須爲珮 明珠貫く可くんば 須く珮と爲すべし

4 白壁堪裁且作環 白壁裁す堪くんば 且く環と作さん

子夜休歌團扇掩 子夜 歌うことを休め 團扇もて掩い

新正未破剪刀閑 新正 未だ破せず 剪刀閑なり

猿啼鶴怨終年事 猿啼き鶴怨む 終年の事

8 未抵熏爐一夕間 未だ抵らず熏爐一夕の間に

校

0 文苑英華二四六（酬和類）・唐詩類苑一〇三（人部嘲戲類）

1 青 英華「清一作春」 稿本旁注「春」 全唐詩校注「一作春」

屈復本「金」

2 梢 英華・叢刊本・稿本「稍」

角 英華「閣」

5 休 朱鶴齡本・全唐詩校注「一作欲」 稿本旁注「欲」

7 怨 英華「望集作怨」 朱本校注「英華作望」 稿本旁注「望」

全唐詩校注「一作望」

8 熏爐 英華「爐香集作熏爐」 朱本校注「英華作爐香」 稿本旁注

「爐香」 全唐詩校注「一作爐香」

熏 高麗本「香」

韻

上平二十七刪（關・環）二十八山（山・閑・間）同用

\*

朱鶴齡

6 新正未破。言未入正月也。

7·8 道源注。言終歲相思。不如一夕佳會。

吳喬

7·8 言終歲相思。不如一夕佳會。

朱彝尊

2 相去不遠。

3 其勢可諧。

5 不必怨。

6 有其時。

何焯

〔讀書記〕

3 韓詩外傳。曾子曰。君子有三言。可貫而佩之。

徐德泓

首二句。言不知經過多少關隘。而始得見別館景色。甚言難至也。

貫珠爲佩。喻室家富聯合同棲。而今不能。且權宜以處。如裁璧作

環耳。佩有常繫義。環有待圓義。如此則須字且字。亦不虛閑矣。

團扇句。言未遭撻辱。無憔悴羞見之情。不須歌此。而新正句。又

狀其年正月初春。容無改舊也。結謂相思雖經歲之久。祇屬空虛。豈

能抵此一夕之歡乎。

姚培謙

承上章言望之愈杳。而思之愈堅也。青門迢遞幾何。而柳梢樓角。

直如南山爲之間隔。甚言其不得近也。然豈因其不得近而遂已哉。

既遇明珠。不得他爲佩不止。既逢白璧。不劉他爲環不休。中聯特

作豔語動之。團扇遮羞。剪刀未破。想到熏爐一夕間事。庶幾終年

苦志。爲之一酬。否則猿啼鶴怨。悵望何時已也。語語是戲贈妙絕。

屈復

一二。居處甚近。三四。有可合之具。五言無容空虛。六言有暇可

爲。七八。承五六。結言經年愁未如今夕之甚也。

程夢星（七一五頁參照）

6 新正未破者。新正未動剪刀也。今都下尙有此風。正月。望後逢

破日動裁。他處亦多擇日始動剪刀。

紀昀

〔詩說下〕（七一六頁參照）

〔評本〕前一首。屬其防閑。後一首。代寫閨怨。所謂戲也。

5 休歌。猶曰停歌。亦不作莫字解。

7·8 末二句。寫怨曠之深。道源注謂終歲相思不如一夕佳會。失

其指矣。

馮浩

首二。想其所居。中四。寫其整理服飾。深居少事。皆遙思而得之

也。結言一夕相思。甚於終年怨望。眞不可禁。道源乃謂終歲相思

不如一夕佳會。衲子論風懷。宜相左矣。

2 終南山在長安正南。

5 子夜。夜半。非子夜歌也。休歌。歌罷也。

6 程曰。謂新正未動剪刀也。今尙有此風。按。未破。猶曰未殘。

杜詩。二月已破三月來。朱氏解作未入正月。誤。

張采田

〔會箋〕七一六頁參照。

近代注釋

〔森槐南〕上卷三七一頁。

\* \*

1 〔楚辭招魂〕虎豹九關（五臣注 關。鑰。）。啄害下人些（王逸

注 言天門凡有九重。使神虎豹執其關閉）。〔文選二三劉楨贈五官

中郎將四首之三〕白露塗前庭。應門重其關（李注 爾雅曰。正門。

謂之應門）。〔庾肩吾南苑還看人詩〕洛陽初度燭。青門欲上關。

迢遞 〔文選二八謝朓鼓吹曲〕逶迤帶淥水。迢遞起朱樓（李注

吳都賦：劉逵注曰。迢遞。遠望懸絕也）。〔又二六謝朓郡內高齋閑

坐詩〕結構何迢遞。曠望極高深。義山にまた〔安定城樓295〕迢遞

高城百尺樓。綠楊枝外盡汀洲。

青門 〔漢書九九中王莽傳〕（天鳳三年）七月辛酉。霸城門災。

民間所謂青門也。〔水經注一九渭水注〕十二門。東出北頭：第三

門。本名霸城門。王莽更名仁壽無疆亭。民見門色青。又名青城門。

或曰青綺門。亦曰青門。〔文選二三阮籍詠懷詩十七首之九〕昔聞

東陵瓜。近在青門外。〔沈佺期初冬從幸漢故青門應制詩〕漢王建

都邑。渭水對青門。〔杜甫題新津北橋樓詩〕白花簾外菜。青門檻

前柳。〔岑參青門歌送東臺張判官〕青門金鎖平旦開。城頭日出使

東回。青門柳枝正堪折。路傍一日幾人別。東出青門路不窮。驛樓

官樹灞陵東。

幾關 用例未見。幾重關の意か。重關ならば、〔文選二七・玉

臺新詠二曹植美女篇〕青樓臨大路。高門結重關。義山にまた〔南

潭上亭抒情468〕鵲舟繁遠岸。魚鑰啓重關。

2 柳梢 用例未見。

樓角 〔杜甫東樓詩〕樓角臨風迥。城陰帶水昏。〔劉禹錫百花

行〕紅燄出牆頭。雪光映樓角。

南山 〔文選三張衡東京賦〕廼構阿房。起甘泉。結雲閣。冠南

山（薛綜注 終南山在長安南）。〔杜甫秋興八首之五〕蓬萊宮闕對

南山。承露金莖霄雲間。〔杜牧長安秋望詩〕南山與秋色。氣勢兩

相高。

3・4 〔玉臺新詠九張衡四愁詩四首之三〕美人贈我玳瑁簪。何以

報之明月珠。〔又張載擬四愁詩四首之三〕佳人遺我雙角端。何以

贈之雕玉環。〔文選六左思魏都賦〕明珠兼寸。尺璧有盈。

3 〔韓詩外傳二〕曾子曰。君子有三言。可貴而佩之。〔拾遺記四〕

此蛾出於員丘之穴。穴洞達九天中。有細珠。如流沙。可穿而結。

因用爲珮。此是神蛾火也。〔列仙傳〕鄭交甫常遊漢江。見二女。

皆麗服華麗。佩兩明珠。大如雞卵。

〔玉臺新詠五沈約十詠脚下履〕逆轉珠珮響。先表繡桂香。〔李

白宮中行樂詞八首之六〕素女鳴珠珮。天人弄綵毬。

明珠 〔漢書九六下西域傳贊〕自是之後。明珠文甲。通犀翠羽

之珍。盈於後宮。〔文選一九曹植洛神賦〕戴金翠之首飾。綴明珠

以耀軀。

貫〔禮記樂記〕故歌者上如抗。下如隊。曲如折。止如蘄木。倨中矩。句中鉤。纍纍乎端如貫珠。〔後漢書志三〇輿服下〕〔皇后〕步搖。以黃金爲山題。貫白珠爲桂枝相繆。

4 〔爾雅釋器〕肉倍好。謂之璧。好倍肉。謂之瑗。肉好若一。謂之環。〔西京雜記六〕魯恭王得文木一枚。伐以爲器。意甚玩之。中山王爲賦曰。青綈紫綬。環璧珪璋。

白璧〔史記七六虞卿傳〕虞卿者。游說之士也。躡蹻擔簦。說趙孝成王。一見。賜黃金百鎰。白璧一雙。〔文選二八鮑照放歌行〕豈伊白璧賜。將起黃金臺。

裁〔文選一班固西都賦〕雕玉瑱以居楹。裁金璧以飾瑱〔李注上林賦曰。華榱壁璫。韋昭曰。裁金爲璧。以當榱頭〕。李善によれば、玉の瑱を彫りて以て楹を居らしめ、金の璧を裁して以て瑱を飾る、とよむ。〔玉臺新詠四丘巨源詠七寶扇詩〕裁狀白玉璧。縫似明月輪。

5 子夜〔樂府詩集四子夜歌解題〕唐書樂志曰。子夜歌者晉曲也。晉有女子。名子夜。造此聲。聲過哀苦。宋書樂志曰。晉孝武太元中。琅邪王軻之家有鬼。歌子夜。則子夜是此詩以前人也。樂府解題曰。後人更爲四時行樂之詞。謂之子夜四時歌。又有大子夜歌。子夜警歌。子夜變歌。皆曲之變也。〔庾信烏夜啼樂府〕促柱繁絃非子夜。歌聲舞態異前溪。〔孟浩然崔明府宅夜觀妓詩〕長袖平陽曲。新聲子夜歌。

時刻としての用例。〔耿漳秋夜會宿李永宅詩〕子夜高梧冷。秋陰遠漏微。〔呂溫奉和張舍人閣中直夜詩〕涼生子夜後。月照禁垣深。

休歌〔杜甫洗兵馬詩〕隱士休歌紫芝曲。詞人解撰河清頌。

團扇 團扇といえ、班婕妤怨歌行〔文選二七〕と桃葉答王獻之〔團扇歌〔玉臺新詠一〇〕と却扇が連想される。〔無題二首之一〕366〕扇裁月魄羞難掩の注〔集釋稿一〕本學報五三册六五二頁〕參照。なお團扇歌には別の傳承もある。〔樂府詩集四五團扇郎六首解題〕古今樂錄曰。團扇郎歌者。晉中書令王珣。捉白團扇與婢婢謝芳姿。有愛情好甚篤。婢捶撻婢過苦。王東亭聞而止之。芳姿素善歌。嫂令歌一曲當赦之。應聲歌曰。後人因而歌之。團扇も子夜とともにすべて男女の豔情の歌謡である。

〔玉臺新詠五何遜擬輕薄篇〕倡女掩扇歌。小婦開簾織。〔又看新婦〕何如花燭夜。輕扇掩紅妝。〔又學青青河邊草〕歌筵掩團扇。何時一相見。

6 新正〔嚴維歲初喜皇甫侍御至詩〕湖上新正逢故人。情深應不咲家貧。〔白樂天除夜寄弟妹詩〕病容非舊日。歸思逼新正。〔杜牧早春贈軍事薛判官詩〕雪後新正半。春來四刻長。

破 詩詞曲語辭匯釋卷三に本篇をも例にあげて「破、猶過也。」の訓を與える。匯釋の例詩では杜甫の二月已破三月來、および臘破思端綺、春歸待一金がこと近い。

剪刀閑 (1)朱鶴齡は荆楚歲時記の人勝を作る習俗にかける。

〔荆楚歲時記〕正月七日爲人日。以七種菜爲羹。翦綵爲人。或鏤金薄帖屏風上。忽戴之。像人入新年。形容改新（類聚四）。〔又〕或鏤金薄爲人。以貼屏風。亦戴之頭鬢（注 董勛問禮俗云。人入新年。形容改從新）（御覽三〇）。

（2）程夢星は年頭にはハサミを使わぬ習俗をいうとする。馮浩も程説に従う。この方が句意が通じやすいようではある。

〔爾雅釋言〕劑。翦。齊也（郭注 南方人呼翦刀爲劑刀）。〔玉臺新詠八劉綬雜詠三首寒閨〕箱中翦刀冷。臺上面脂凝。〔宋之問奉和立春日侍宴內出翦綵花應制〕今年春色早。應爲翦刀催。

7 猿啼鶴怨 〔文選四三孔稚珪北山移文〕至於還隴入幕。寫霧出楹。蕙帳空兮夜鶴怨。山人去兮曉猿驚。〔楊炯和崔司空傷姬人詩〕昔時南浦別。鶴怨實琴弦。

猿啼の例は、〔文選二二謝靈運登石門最高頂詩〕活活夕流駛。噉噉夜猿啼。〔梁簡文帝蜀道難二首之二〕笛聲下復高。猿啼斷復續。

終年 〔玉臺新詠一宋子侯董嬌嬈詩〕終年會飄墮。安得久馨香。〔杜甫雲詩〕終年常起峽。每夜必通林。

8 義山の類句に二種がある。（1）〔牡丹169〕石家蠟燭何曾翦。荀令香爐可待熏。〔酬崔八早梅有贈兼示之作190〕謝郎衣袖初翻雪。荀令熏爐更換香。（2）〔促漏195〕舞鸞鏡匣收殘黛。睡鴨香爐換夕熏（集釋稿（二）本學報五四册四二三頁）。荀彧的故事（習鑿齒襄陽記）を用いた（1）はともかく、（2）は明かに豔情にかかわる表現である。

〔文選一六江淹別賦〕又若君居淄右。妾家河陽。同瓊珮之晨照。共金爐之夕香。

未抵 句頭の用例が義山にいまひとつ。いずれも語意は重い。

〔淚320〕朝來潮水橋邊問。未抵青袍送玉珂。〔白樂天讀史五首詠史詩〕乃知汨羅恨。未抵長沙深。

熏爐 劉向に〔熏爐銘〕あり。〔文選一三謝惠連雪賦〕携佳人兮披重幄。援綺衾兮坐芳褥。燎熏爐兮炳明燭。酌桂酒兮揚清曲。

〔玉臺新詠七梁簡文帝擬沈隱侯夜夜曲〕枕啼常帶粉。身眠不著牀。蘭膏盡更益。熏鑪滅復香。但問愁多少。便知夜短長。〔溫庭筠織錦詞〕爲君裁破合歡被。星斗迢迢共千里。象齒熏鑪未覺秋。碧池中有新蓮子。

一夕 〔楚辭九章抽思〕惟郢路之遼遠兮。魂一夕而九逝。〔文選一六潘岳寡婦賦〕意忽恍以遷越兮。神一夕而九升。〔白樂天寄楊六詩〕猶冀乘暝來。靜言同一夕。

\* \* \*

作者が「任秀才」になり代っての、いわば擬自述とみなしておく。ただし前作もそうだったが、第三者の口からする語りと解釋できぬこともない。

1・2 遙かに天高くそびえる長安城の青門、關鎖が嚴重に一體幾つになつてゐるだろうか。そのあたり、柳の梢や樓屋の先端ごしに、南山が望み見られる。舊注では關を關所とし、迢遞を平面の距りとする。首連が一般的な狀景描寫でなく、もし女のいる場所



をいうのだとすると、樓角の樓があるいは前作の「花樓」をさすか。もっとも、そんな考證をしても始まらない。

3・4 明月のような大眞珠、もしひもを通させてもらえらなら、おびだまにちようどよいのだが。まっ白な美しい璧、もし細工してよければするから、まあ腕輪にでもしてみたら——女のほしがる物なら何でもやりたい。張衡・張載の四愁詩をふまえると思われるので、程夢星らに従い、男からの贈り物についてのべたとみる。さらに一捻りした比喻表現（徐德泓）かもしれないし、當事者同士の間だけで分る洒落暗號の可能性も否定できないが。また、女を「掌中の物」として愛玩したい（森槐南||姚培謙）というのも一説。

5・6 女のことを想像しての一連であろう。眞夜中（女は）歌い終ったまま、團扇を口もとに當てている。新年正月がまだ過ぎておらず（女の）裁ち缺もひまだ。5句、子夜は子の刻と子夜歌にかける（馮浩は否定するが）。團扇もウチワと團扇歌にかける。子夜歌はいうまでもなく、團扇掩て班婕妤と障扇までからませるならば、一句はべた一面の女の典故で塗りつぶされる。それに對し、松の内だから裁縫仕事も休み、という6句が典故らしい典故もない現實描寫だとなるといかにもチグハグで不安は残る。歲時記を用いたとすれば、閑の字が浮く。

7・8 むかし、ともに住む人に去られたあと、年がら年中泣き暮した猿や鶴のことを知っているが、しかし、かれらのうらみつら

みの情の長さ深さとて、本來なら二人寄り添ってその匂いを聞くべきかぐわしい香爐のそばで、ただ一人一夜をすごすこの悲しみにはとてもとても及びもつかないのだ。注釋は新舊二様に分れ、道源以下の舊説は紀昀以後退けられるが、要は8句熏爐の語のとおり方いかんにかかり、これも一概に捨てらるべきではないと思われる。舊説では、未練たつぷりで歡會のさまを心に描く意になろう。前作同様、英華本の異文はいずれもととりあげるに足りない。

（松岡秀明）

題二首後重有戲贈任秀才 268

二首を題するの後に重ねて戲に任秀才に贈る有り

一丈紅薔擁翠筠 一丈の紅薔 翠筠擁す  
羅窓不識繞街塵 羅窓は識らず 街塵の繞うを  
峽中尋覓長逢雨 峽中に尋覓すれば 長に雨に逢い  
4月裏依稀更有入 月裏に依稀として 更に人有り  
虛爲錯刀留遠客 虚しく錯刀の爲に 遠客を留め  
枉緣書札損文鱗 枉に書札に緣り 文鱗を損う  
遙知小閣還斜照 遙に知る 小閣 還た斜照  
8羨殺烏龍臥錦茵 羨殺す 烏龍の錦茵に臥すを

校

0 才調集六・唐詩類苑一〇三（人部嘲戲類）

二首 才調集なし

題二首後重有 高麗本六字なし

4 稀 高麗本「稀」

6 札 毛本「劄」

文 稿本「丈(?)」を「文」に改む

7 閣 高麗本「閣」

8 全唐詩校注「原注謔之也」(謔之也は統鑑の注解)

韻

上平十七真(筠・塵・人・鱗・茵)

\*

胡震亨

8 謔之也。

吳喬(箋注なし)

朱彝尊

3・4 定遠謂峽中二句。戲甚。有傷雅道。予謂任意更毒。幾不可

道。

何焯

〔讀書記〕

7・8 落句。見往還既久。烏龍亦不復作妬媒也(評本 見を「言」に作る)。

〔評本〕 每以夜往。故曰長逢雨。腹連。似謂竟忘其夫之尙存也。落句。閣外烏龍。或能猝起。雖戲之。實敬之。謂之贈。○馮云。

李義山七律集釋稿(四)

戲得太毒。得毋有傷厚道。○小馮云。的是宿娼。

徐德泓

題亦承上而言。首聯。狀祕室景象。乃藏嬌之地。次聯。寫暗聚意。第五句。言偶至以答其情。故曰虛爲。亦如遠客之暫來也。第六句。言身不能常至。惟音問潛通。枉害使輩之僕僕耳。結點室中暮景。言可絕外人之至。無感悅驚塵事也。始終是戲意。

姚培謙

此爲有所妄想而不得遂之詞。紅薔擁翠筠之中。何由得見。猶之羅窗深處。不識銜塵也。峽中逢雨。月裏人有。全是妄想自纏自縛。于是虛想美人有錯刀之贈。於是常託文鱗傳密意之書。捕風捉影。勞心甚矣。曾不如深院烏龍。猶得依栖於斜陽小閣間也。戲得雋甚。

屈復

一二。所居深密。從未出門。三。尋覓甚難。四。愛博。五。非憐真才。六。虛文無益。結。惟有遙羨烏龍而已。八與四。似復。然此只重在遙羨二字。勿呆講。

程夢星

此乃緊接前二首之情事。首二句。言友人所居之幽邃也。三四二句。言其所遇之人。如神女姮娥也。五句。言已不得預此盛會。六句。言空以書札。與於我聞也。七八二句。始贈任言任在斜陽小閣之中。亦當有烏龍錦茵之羨也。

紀昀

〔詩說下〕(七一六頁參照)

〔評本〕此又以彼有所歎。此空擬望爲譴。此種皆不以詩論。

馮浩

此必任秀才有所思於青樓中人也。否則措辭豈得爾。

0 上二首當已是贈任。

2 往來尋覓。頻繞其居。其如羅窗中人竟不識何。

3・4 二句。言任每訪必遇有人。不得入也。

5・6 二句。謂虛相聯絡。終無實意。

8 戍籤。譴之也。(中略)烏龍。喻他人。譴任之不得如也。韓偓

〔妬媒〕詩。亦云橫臥烏龍作妒媒。

張采田

〔會箋〕(七一六頁參照)

〔辨正〕古人戲謔代贈。往往有之。何爲不可以詩論。

馮班

太刻薄。

近代注釋

〔森槐南〕上卷三七三頁。〔山之內正彥〕一二〇頁。

\* \*

0 才調集編者は本篇收録に際し「二首」二字を削り、高麗本がそ

れに基づいて本篇を前掲連作266と切離したのではないか。麗本

では連作を卷七に、本篇を卷八に置く。しかし、集本によるなら

ば、當然本篇をふくめての三連作とみなすべきである。

任秀才 未詳。〔奉同諸公題河中任中丞新剏河亭四韻之作526〕

の詩題に見える任中丞とは別人であろう。

1 一丈 〔李白過汪氏別業詩二首之二〕數枝石榴發。一丈荷花開。

〔南方草木記〕漸間又一種葵。俗名一丈紅。花有五色(全芳備祖前集一四)。

紅薔 義山にまた〔日射182〕迴廊四合掩寂寞。碧鸚鵡對紅薔薇。

〔權德輿薔薇花詩〕環列從容蹀躞歸。光風飴蕩發紅薇。〔溫庭筠

題李處士幽居詩〕濃陰似帳紅薇晚。細雨如煙碧草春。ただし紅薔  
は用例未見。

擁 〔獨孤綬蟠桃賦〕疑蒸林之相合。乃一木之所擁(文苑英華  
一四四)。

翠筠 〔楊巨源池上竹詩〕翠筠入疎柳。清影拂圓荷。〔姚合題

薛員外閣詩〕翠筠和粉長。零落逐荷傾。

2 羅窓 用例未見。紗窓ならば、〔玉臺新詠八劉孝威都縣遇見人

織率爾寄婦詩〕雲棟共徘徊。紗窓相向開。〔庾信蕩子賦〕沉復空

牀起怨。倡婦生離。紗窓獨掩。羅帳長垂。義山の〔日射182〕日射

紗窓風撼扉。香羅掩手春事違。

不識 〔文選二〇曹植送應氏詩二首之一〕遊子久不歸。不識陌

與阡。

街塵 〔于武陵贈賣松人詩〕長安重桃李。徒染六街塵。

3 〔張說荊州亭入朝詩〕巫山雲雨峽。湘水洞庭波。

峽中 〔杜甫熱詩〕峽中都似火。江上只空留。〔元稹聽柔之琴

詩〕料得小來辛苦學。又應知向峽中彈。

### 尋覓

〔謝靈運山居賦〕剪榛開逕。尋石覓崖。〔南史五一梁宗室紹傳〕城陷奉詔西奔。及至江陵。人士多往尋覓。令紹說城內事。紹不能人人爲說。乃疏爲一卷。客問者便示之。〔白樂天贈江州李員外十二韻〕經過剡溪雪。尋覓武陵春。〔元稹遣行十首之七〕尋覓詩章在。思量歲月驚。

### 逢雨

用例未見。

### 4 月裏

義山にまた、〔槿花二首之一七四〕月裏寧無姊。〔子直晉昌李花五〕月裏誰無姊。以下は月光の下の意。〔李白過崔八丈水亭詩〕猿嘯風中斷。漁歌月裏聞。〔姚合送劉禹錫赴蘇州詩〕虎丘野寺吳中少。誰伴吟詩月裏行。

### 依稀

〔江淹赤虹賦〕俄而赤蜺電出。蚺蚪神驪。曖昧以變。依稀不常。非虛非實。乍滅乍光。〔玉臺新詠五何遜詠七夕詩〕依稀猶洛浦。倏忽似高唐。〔杜牧代人作〕盼盼凝魂別。依稀夢雨來。

〔趙嘏江樓舊感詩〕同來翫月人何處。風景依稀似去年。

### 有人

〔楚辭九歌山鬼〕若有人兮山之阿。〔王逸注〕若有人。謂山鬼也。被薜荔兮帶女蘿。

### 5 錯刀

〔文選二九張衡四愁詩四首之一〕美人贈我金錯刀。〔李注漢書曰。王莽鑄大錢。又造錯刀。以金錯其文。續漢書曰。佩刀。諸侯王黃金錯鐔。謝承後漢書曰。詔賜應奉金錯把刀。何以報之英瓊瑤。路遠莫致倚追遙。何爲懷憂心煩勞。〔李注〕古詩曰。路遠莫致之。〔杜甫機拂子詩〕熒熒金錯刀。擢擢朱絲繩。〔九家注〕佩刀之屬也。〔馬戴贈別北客詩〕飲盡玉壺酒。贈留金錯刀。

(b)〔漢書二四下食貨志〕〔王莽〕又造契刀錯刀。契刀。其環如大錢。身形如刀。長二寸。文曰契刀五百。錯刀。以黃金錯其文。

曰一刀直五千。〔師古曰。王莽錢刀今並尙在。形質及文。與志相合。無差錯也。〕〔杜甫對雪詩〕金錯囊徒罄。銀壺酒易餘。〔九家注〕趙云。專指言錢也。非金錯佩刀者。〔韓愈潭州泊船呈諸公詩〕聞道松醪賤。何須慙錯刀。

### 留遠客

〔楚辭大招〕粉白黛黑。施芳澤只。長袂拂面。善留客只。〔梁武帝子夜冬歌四首之一〕賣眼拂長袖。含笑留上客。〔梁簡文帝江南曲〕清風吹人光照衣。光照衣。景將夕。擲黃金。留上客。

〔杜甫觀李固請司馬弟山水圖三首之一〕寒天留遠客。碧海挂新圖。

### 遠客

〔楚辭九辨〕去鄉離家兮徠遠客。超逍遙兮今焉薄。

### 6

〔文選二七飲馬長城窟行〕客從遠方來。遺我雙鯉魚。呼兒烹鯉魚。中有尺素書。

### 書札

〔古詩十九首之十七〕客從遠方來。遺我一書札。〔玉臺新詠六徐徘徊贈內詩〕聊因一書札。以代九迴腸。〔杜甫別蔡十四著作詩〕若鴻南轅使。書札到天垠。

### 損文鱗

〔杜甫三韻三篇之一〕高馬勿唾面。長魚無損鱗。

### 文鱗

〔文選八司馬相如上林賦〕璿玉旁唐。玢幽文鱗。〔郭璞曰。玢幽。文理貌也。音紛彬。赤瑕駁皴。雜重其間。〕〔柳宗元登蒲州石磯詩〕浮暉翻高禽。沈影照文鱗。

### 7 小閣

〔南史二〇謝莊傳〕與大司馬江夏王義恭賤。自陳：眼患五月來便不復得夜坐。恒閉帷避風。：今之所止。唯在小閣。〔又

三〇何胤傳〕山有飛泉。廻起學舍。即林成援。因巖爲堵。別爲小閣室。寢處其中。躬自啓閉。〔白樂天香爐峰下新卜山居詩〕日高睡足猶慵起。小閣重衾不怕寒。

斜照 〔玉臺新詠七簡文帝擬落日窓中坐詩〕杏梁斜日照。餘暉映美人。〔魏書二三孝文昭皇后傳〕初。后幼曾夢在堂內立。而日光自窓中照之。灼灼而熱。后東西避之。光猶斜照不已。〔上官儀奉和秋日即目應制〕晚雲含朔氣。斜照蕩秋光。〔錢起送張少府詩〕愁雲破斜照。別酌勸行子。

8 殺 〔古詩十九首之十四〕白楊多悲風。蕭蕭愁殺人。〔玉臺新詠五沈約少年新婚爲之詠〕羞言趙飛燕。笑殺秦羅敷。〔萬楚五日觀妓詩〕眉黛奪將萱草色。紅裙妬殺石榴花。

烏龍 黑犬につける名前だろう。〔搜神後記九烏龍條〕會稽句章民張然。：在都養一狗。甚快。名曰烏龍。常以自隨。〔元稹夢遊春七十韻〕烏龍不作聲。碧玉曾相慕。〔白樂天和夢遊春詩一百韻〕轉行深深院。過盡重重屋。烏龍臥不驚。青鳥飛相逐。：遙見窓下人。娉婷十五六。

錦茵 〔文選一六潘岳寡婦賦〕易錦茵以苦席兮。代羅幃以素帷〔李注 桓子新論曰。吾謂楊子曰。君數見乘輿。錦繡茵席。〕〔玉臺新詠四丘巨源詠七寶扇詩〕卷情隨象簾。舒心謝錦茵。〔杜甫麗人行〕後來鞍馬何逡巡。當軒下馬入錦茵。

この詩の「刻薄」とさえ評される戯謔の神髓をよくとらえてい

るのが馮浩で、そのコメントは「玉谿生詩詳注」全篇を通じてみても、最上級のできばえと思われる。以下もっぱら馮浩によって解釋する。

1・2 一文にもなるうかという眞赤なバラを翠の竹がとりまく。さらに奥まった、薄絹のとばりのかかる窓邊には巷の塵が舞いこもうにも素知らぬ顔で受けつけてくれぬ。何本もの竹に圍まれるバラ、街塵を寄せつけぬ艶めかしい窓。まことに象徴的な女の住まい。とりまきの多い女は一見の客には冷たいのだ。繞街塵は、街ヲ繞ルノ塵（山之内正彦）ともよめるか。

3・4 神女の住まい、巫山の峽谷に彼女を探しもとめて行くと、いつもいつも雨となつて色男の裏王に會っている。姮娥の住まい、月の世界に行つてみると、どうやら彼女の相手としてほかに人がいるらしい。いつ行つても他の男としつぱりぬれているのだ。二句全く同一パターンの反復。有人の人は男だと考えられるので、ここでは九歌山鬼篇を引かない方がよいかもしれない。

5・6 ところが、山吹色が拜みたいばかりに、實意もないくせ客の氣だけは引いてあきらめさせない。で、手紙をよすが、嘘で固められた中味に對し、色あざやかな花箋に水莖のあとも麗わしい外見ばかりが何とも空々しいかぎり。ほんとに薄情な女なのだ。遠客は、文字通り遠來の客か、または手の届かぬ心理的な距離の遠さか。二句ともに行爲の主體は男でなく女とし、5句錯刀は贈り物でなく金錢としたが、この一連は最も説の分れる個所で

ある。

7・8 はるかに思いをはせれば、あの小さな離れにはまた夕日がさしこんでいるだろう。錦のしとねに寝ころんでる烏龍のやつが羨しくて死にそうだ。屈復は臥鳥龍を4句の有人の比喩とするが、直接に結びつけて考える必要はない。犬になってもそばにいたい任秀才の心境なのだ。

(矢淵孝良)

春雨 274

春雨

悵臥新春白袷衣 悵臥 新春 白袷衣

白門寥落意多違 白門寥落 意多違

紅樓隔雨相望冷 紅樓雨を隔て 相望めば冷かなり

4 珠箔飄燈獨自歸 珠箔燈に飄って 獨自に歸る

遠路應悲春晚晚 遠路應に春の春晚たるを悲しむべし

殘宵猶得夢依稀 殘宵猶お夢の依稀たるを得たり

玉璫緘札何由達 玉璫緘札 何に由りてか達せん

8 萬里雲羅一鴈飛 萬里の雲羅 一鴈飛ぶ

校

0 才調集六・唐詩類苑四(天部雨類)

1 悵 才調集・叢刊本・稿本・類苑・統籤「悵」 錢本校注「悵」

5 春 屈復本「時」

李義山七律集釋稿(四)

6 帋 錢本・高麗本をのぞき「稀」

7 玉 高麗本「三」

8 鴈 高麗本「夜」

韻

上平八微(衣・違・歸・帋・飛)獨用

\*

朱鶴齡

7 玉璫緘札。猶今所云侑緘。

何焯

〔評本〕腹聯。奧妙。

徐德泓

此卽景而感懷也。首聯。先敍當春寥落之況。第三句。始點入雨字。後俱有雨意在內。最得遠神。玉璫緘札。謂以璫伴緘也。鴈被雲羅。不得達矣。

姚培謙

此借春雨懷人。而寓君門萬里之感也。白袷。則非青紫之客。白門。則非爭逐之場。紅樓隔雨。擁蔽已深也。珠箔飄燈。丹心自照也。春晚晚。則慮年歲之不我與。夢依稀。則憂疎遠之不易通。玉璫緘札。喻言始猶冀一達君聰。今既無由。則雲路蒼茫。網羅密布。一鴈孤飛。不但寥落堪悲。抑亦損傷可慮矣。哀哉。此等詩。字字有意。概以閨幃之語讀之。負義山極矣。

屈復

中四。是白門悵臥時。憶往多違事。末二句。是悵臥時。所思後事。

## 程夢星

此亦應辟無聊。望人汲引之作。蓋將入藩幕。未出長安之時也。前四句。言在長安之景。後四句。言就辟聘之情。起句。言章服無分。次句。言朝籍不通。三句。望先達如在天半。四句。歎一身如入迷途。五句。正言其將有遠役。六句。猶冀其戀戀故人。七句。傷其陳情不省。八句。感其惟入網羅已耳。

## 紀昀

〔詩說上〕宛轉有味。平山箋。以爲此有寓意。亦屬有見。然如此詩即無寓意亦自佳。○景州李露園嘗曰。詩令人解得寓意見其佳。即不解所寓之亦見其佳。乃爲好詩。蓋必如是乃蘊藉渾厚耳。因論此詩而附記之。

〔評本〕此因春雨而感懷。非詠春雨也。亦宛轉有致。然格未高耳。

## 馮浩

2 此似取白門楊柳之意。

5 其人遠去。

6 惟夢中可尋。

7・8 末聯。記私札傳情之事。

## 張采田

〔辨正〕吾不知何等詩方合紀氏之格。若謂香奩體詩爲不合格。則法惟有盡刪古今之香奩體詩而後可。而楚騷之美人香草。三百篇之螭首蛾眉。皆將爲詩教中大罪人。文苑中野狐禪矣。有是理乎。且

李杜王韋。有李杜王韋之家派。義山有義山之家派。李杜王韋之高格響調。豈所論於義山。使義山而貌襲李杜王韋。雖合於紀氏之格。亦必不能如今日之獨傳千古也。○此與燕臺二章（秋544冬545）相合。首二句。想其流傳金陵寥落之態。三四句。經過舊居。室邇人遐。惟籠燈獨歸耳。五句。道遠難親。六句。夢中相見。結即欲織相思花寄遠之意。非義山在江鄉所作者也。余初稿似誤。

## 黃侃

此爲滯居長安憶家之作。白門即街西池館詩28所謂白閣佗年別者也。岑參有歸白閣艸堂詩。杜甫漢陂西南臺詩。銷磨終南翠。顛倒白閣影。皆謂終南支峯。近瞰長安。故因以號帝里。非建康之白門也。紅樓二句。正寫寥落之狀。

## 近代注釋

〔安徽師大〕一九八頁。〔陳永正〕六一頁。

\* \*

## 0 春雨

〔莊子外物〕春雨日時。草木怒生。〔夏侯湛愍桐賦〕納谷風以疏葉。含春雨以濯莖。濯莖天天。布葉譟譟。春雨は草木のいのちを育む雨である。或いは花の時節にそぐあなにくしの雨である。寶羣の同題の七絶〔春雨〕昨日偷閑看花了。今朝多雨奈人何。人間盡似逢花雨。莫愛芳菲濕綺羅。すべて本篇とは一點の通ずるものもない。春雨にかかわる諸作のうち、次の張籍の詩がいささか似た雰囲気を持つ。〔臥疾〕空堂留燈燭。四壁青熒熒。…僮僕各憂愁。杵臼無停聲。見我形顛頽。勸藥語丁寧。春雨枕席冷。

窓前新禽鳴。

### 1 恨臥

用例未見。異文の恨臥もまた用例未見。愁臥ならば〔文選一六江淹別賦〕居人愁臥。悦若有亡。義山の次の句はやや近い。〔回中牡丹爲雨所敗二首之一584〕有人惆悵臥遙帷。恨の字については〔文選一六司馬相如長門賦〕日黃昏而絕望兮。恨獨託於空堂（李注 說文曰。恨。望恨也）。なお恨望は義山の愛用語で、〔和鄭愚贈筆妓553〕風流大堤上。恨望白門裏。〔贈從兄閔之328〕恨望人間萬事違。私書幽夢約忘機（七律の首連）。また恨臥の臥は高臥の臥で、横臥の臥ではない。

### 新春

〔庾信慨然成詠詩〕新春光景麗。遊子離別情。〔李端嶽州逢司空曙詩〕新春兩行淚。故國一封書。

### 白拾衣

義山にまた〔楚澤17〕白拾經年卷。西來又早寒。〔文選一三潘岳秋興賦〕藉莞弱。御拾衣（李注 說文曰。拾。衣無絮也。古洽切）。〔裴氏語林〕顧和爲揚州從事。月旦當朝。未入。停車州門外。周侯飲酒已醉。著白拾。憑兩人來詣丞相。歷和車邊。和先在車中覓蟲。夷然不動。〔王初卽夕詩〕風幌涼生白拾衣。星榆纔亂絳河低。

### 2 白門

〔玉臺新詠一〇近代西曲歌陽叛兒〕甍出白門前。楊柳可藏鳥。郎作沈水香。儂作博山鑪。〔上聲歌八首之四〕三鼓染烏頭。聞鼓白門裏。寧裳抱履走。何冥不輕紀（樂府詩集四五）。〔讀曲歌八十六首之三十〕白門前。烏帽白帽來。白帽郎。是儂良。不知烏帽郎是誰（樂府詩集四六）。こうした樂府に見える白門を必ずし

も建康城の白門に同定はできないし、またその要もない。

### 寥落

〔文選一七陸機文賦〕心牢落而無偶。意徘徊而不能掃（李注 牢落。猶遼落也。：蔡邕誓師賦曰。時牢落以失次。粵絃蹇而陽絕）。〔世說言語〕袁彥伯爲謝安南司馬。都下諸人送至瀨鄉。將別。既自悽惻。歎曰。江山遼落。居然有萬里之勢。〔文選二七謝朓京路夜發詩〕曉星正寥落。晨光復泱泱（李注 寥落。星稀之貌也）。〔王勃上巳被禊序〕琴臺遼落。猶停隱遁之賓。釀渚荒涼。尙得逢迎之客。〔呂溫道州郡齋臥疾詩〕獨臥郡齋寥落意。隔簾微雨濕梨花。

### 意多違

〔文選三〇沈約學省愁臥詩〕纓珮空爲忝。江海事多違（李注 廣雅曰。違。異也。謂乖異也）。〔杜甫卽事詩〕羣凶猶索戰。回首意多違。〔崔峒贈寶十九詩〕靈臺暮宿意多違。木落花開羨客歸。

### 3 紅樓

〔江總長相思詩〕紅樓千愁色。玉筍兩行垂。心心不相照。望望何由知。〔李白陌上贈美人詩〕美人一笑辜珠箔。遙指紅樓是妾家。〔于鵠長安遊詩〕久臥長安春復秋。五侯長樂客長愁。繡簾朱轂逢花住。錦幘銀河觸雨遊。何處少年吹玉笛。誰家鸚鵡語紅樓。隔雨 用例未見。義山の類似の用例、〔鏡檻301〕散時簾隔露。臥後幕生波。〔銀河吹笙259〕月樹故香因雨發。風簾殘燭隔霜清。

### 相望

〔玉臺新詠一無名人爲焦仲卿妻作〕悵然遙相望。知是故人来。〔庾信望美人山銘〕高唐礙雨。洛浦無舟。何處相望。山邊一樓。〔溫庭筠還水謠〕麟閣無名期未歸。樓中思婦徒相望。〔無題



二首之二112) 相望注參照、集釋稿(一)本學報五三册六二頁。

4 珠箔 (三輔黃圖二桂宮條) 三秦記。未央宮漸臺西有桂宮。中有明光殿。皆金玉珠璣爲簾箔。處處明月珠。金庀玉階。晝夜光明。

〔劉孝威奉和晚日詩〕虬簷挂珠箔。虹梁卷霜綃。〔白樂天長恨歌〕攬衣推枕起徘徊。珠箔銀屏迤邐開。

飄燈 用例未見。いくらか似た例として、〔駱賓王螢火賦〕乍滅乍興。或聚或散。居無定所。習無常翫。曳影周流。飄光凌亂。

獨自 (江總閨怨篇) 池上鴛鴦不獨自。帳中蘇合還空然。〔贈歌妓二首之二64〕獨自注參照。七絕集釋稿(一)本學報五一册五九三頁。

5 遠路 (文選二九蘇武詩四首之四) 征夫懷遠路。遊子戀故鄉。

〔楚辭九懷危俊〕晞白日兮皎皎。彌遠路兮悠悠。〔玉臺新詠九張載擬四愁詩四首之一〕願因飄風超遠路。終然莫致增想慕。〔杜牧新柳詩〕幾處傷心懷遠路。一枝和雨送行塵。

晚晚 (楚辭九辨七章) 白日晚晚其將入兮(年時欲暮。才力衰也)。明月銷鑠而滅毀。〔又哀時命〕白日晚晚其將入兮。哀餘壽之弗將(王注 將。猶長也。言日月西流。晚晚而歿。天時不可留。哀我年命不得長久也)。〔謝靈運善哉行〕陽谷跌升。虞淵引落。景曜東隅。晚晚西薄。〔儲光義同王十三維偶然作十首之二〕我心若虛空。此道將安施。暫過伊闕間。晚晚三伏時。義山はこの語を三例すべて春晚晚のかたちで用いる。〔無題四首之三116〕春晚晚注參照、集釋稿(一)本學報五三册六三七頁。

6 殘宵 用例未見。

依條 (廣韻一條字注) 依條。前出、七二七頁。

7 玉璫緘札 義山にまた、〔燕臺詩秋54〕雙璫丁丁聯尺素。內記湘川相識處。〔夜思568〕寄恨一尺素。含情雙玉璫。當時は書札を函に收めて送った。函にかける緘に璫を一緒にくっつけたのだろ

うか。〔玉臺新詠〕無名人爲焦仲卿妻作〕腰若流紈素。耳著明月璫。〔王粲七釋〕戴明中之羽雀。離華鈴之葳蕤。珥照夜之雙璫。煥煥煥以垂暉。〔釋名釋首飾〕穿耳施珠曰璫。〔張正見晨鷄高樹鳴詩〕當損黃金距。誰論白玉璫。〔杜牧自宣州赴官路逢裴坦詩〕梅花落徑香繚繞。雪白玉璫花下行。

〔韋應物答崔都水詩〕常緘素札去。適枉華章還。〔白樂天送蕭鍊師步虛詞十首卷後以二絕繼之之二〕花紙瑤緘松墨字。把將天上共誰開。

達 (南史八〇侯景傳) 既而中外斷絕。有羊車兒獻計。作紙鴉。繫以長繩。藏於中。簡文出太極殿前。因西北風而放。冀得書達。〔鴛鴦276〕雌去雄飛萬里天。雲羅滿眼淚潸然。〔奉和太原公送楊戴招楊戎396〕潼關地接古弘農。萬里高飛雁與鴻。

8 萬里 (成公綏鴻雁賦) 辰火西流。秋風厲起。軒翥鼓翼。抗志萬里。

雲羅 (文選一四鮑照舞鶴賦) 厭江海而游澤。掩雲羅而見羈。〔李注 鸚鵡賦曰。冠雲霓而張羅。〕〔又三一江淹雜體詩嵇中散言志〕曠哉宇宙惠。雲羅更四陳。

參照、集釋稿(一)本學報五三册六三七頁。

一雁飛 「文選一三謝惠連雪賦」對庭鵲之雙舞。膽雲鴈之孤飛。

〔庾信哀江南賦〕李陵之雙鳧永去。蘇武之一雁空飛（倪璠注。蘇武別李陵詩云。雙鳧俱北飛。一鳧獨南翔。子當留斯館。我當留故鄉。漢書蘇武傳曰。武留匈奴中。常惠教漢使謂單于曰。天子射上林中。得雁。足有繫帛書。言武等在某澤中。單于驚謝。歸武）。〔宋之問明河篇〕鴛鴦機上疎螢度。烏鵲橋邊一雁飛。

\* \* \*

舊解を類別すれば、

A 卽景感懷（徐德泓・黃侃）

B<sub>1</sub> 豔情（馮浩・張采田）

B<sub>2</sub> 豔情を否定、寓意あり（姚培謙・程夢星）

屈復および紀昀は眞意不明。近代注釋はともにB<sub>1</sub>、純粹の豔詩とする。文學研究所編「唐詩選」（一九七八・北京）もおなじ。やはり豔詩とみるのが素直で、義山には珍しく主體の性別も男だと最初から明示される。1句白袷衣の語によって。また舊解は概ね作品の各部分に時間的落差をみとめないが、屈復だけが三段階の時間的構造を考える。義山詩の構造は時空ともにしばしば複雑だし、屈の見解は注目すべきであろう。

1・2 新春の時節だというのに心はうれいに沈み、白いあわせの衣を着てひっそり閉じこもっている。戀人たちのあいびきの場所の白門の地も、今はすっかりさびれはたと感じられ、ほんとうにわが意にそぐわぬのだ。徐德泓は3句以後を雨の景とするが、

むしろ安徽師大説のように首連から春雨に降りこめられと解する方がよい。袷衣は秋ごろもだし、秋の色たる白の字を重ねて用いることにより、春雨には全くふさわしからぬ寂寥感が強調される。悵臥を悵臥とするのは才調集等で、有力な異文ではあるが、句意として必ずしもすぐれない。

3・4 春雨を媒介としての回想——降りしきる春の雨、雨の向うにあの思い出の紅い樓閣が見えて来る。それはただ冷やかに突っ立っているだけだ。そうだ、あの時も同じだった。あの時、紅樓にきらきら輝く眞珠の簾が燈にひるがえるのを後にして、ひとりとはと歸ったのだった。近代注釋はすべて珠箔を雨の比喩とするが、とらない。3句、過去の景が現在の景と重なりとすれば、杜牧の江南春絶句「南朝四百八十寺。多少樓臺煙雨中。」の手法に關連するか。荒井健「杜牧」（一九七四・筑摩書房）六一頁參照。

5 遠い遠い路を隔てる彼方の空の下では、きっと春（の日）がどうしようもなく暮れて行くのを悲しんでいる人がいるだろう。春晚は、あるいは春の季節が過ぎ去ろうとするのをいうか。屈復本が春を時と改めるのは、1句の春の字との重複を嫌ってかもしれないが、義山の七律の字の重複は普通である。

6 その人に會いたいと念じつつ、まどろむ夜明け方、夢のなか、おぼろな面影に辛うじてすがりつけたのだ。屈復説では5・6句は過去だが、2句は過去とも現在ともつかぬ、夢とも現ともつか

ぬ、わが心の世界のように思われる。

7・8 わが心のうちを伝えるため、玉の耳飾を手紙に添え、何とかして届けたいものだが、萬里に張りめぐらされた雲の網に群をはぐれた雁一羽が飛ぶのでは、とても手紙を託しても届きようもあるまい。當時の通信のかたちが未詳なので、玉璫緘札が今ひとつ分りにくい。高麗本の二つの異同は、ともに純然たる誤字だろう。馮浩・張采田および安徽師大、不編年。

(西村富美子)

和韓錄事送宮人入道<sup>324</sup> 韓錄事の宮人の入道を送るに和す

星使追還不自由 星使追還 自らに由らず

雙童捧上綠瓊輈 雙童捧げ上す 綠瓊輈

九枝燈下朝金殿 九枝燈下 金殿に朝し

4 三素雲中侍玉樓 三素雲中 玉樓に侍す

鳳女顛狂成久別 鳳女の顛狂 久別を成し

月娥嬋獨好同遊 月娥の嬋獨 好し同遊

當時若愛韓公子 當時若し韓公子を愛せば

8 埋骨成灰恨未休 骨を埋め灰と成るも 恨み未だ休まず

校

0 瀛奎律髓四八(遷逸類)・唐詩類苑一五四(道部入道類)

4 上 高麗本「侍」

7 公 姚培謙本校注「疑作董」

韻

下平十八尤(由・輈・遊・休)十九侯(樓)同用

\*

朱鶴齡

0 張籍王建戴叔倫元稹于鵠項斯。皆有作。

6 月娥。謂月中姮娥。

7 韓公子。未詳。或曰。韓非爲韓之諸公子。借以況韓錄事也。

〔補注〕俞南史曰。韓公子。疑指韓重。二語蓋暗用吳王女紫玉事也。

朱彝尊

1 惟追還。故不自由。○玩不自由三字。似言仙女既謫而後追還。

舊注何得以李邵事釋之。

7 借比錄事。

何焯

〔讀書記〕觀項斯于鵠之寒窘。乃嘆義山才情過人(評本 項斯于鵠を「于鵠項斯」に作る)。○落句。用韓憑事(評本 「末句。

借處家事。收足和字」)。

姚培謙

姚培謙

宮人入道。自是失意事。詩却向失意中。說出得意。言此宮人。必自謫降中來。今奉星使追還。得以上車而去。朝侍於玉樓金殿之間。眞幸事也。從今入道以後。笑鳳女之顛狂。伴月娥之嬋獨。棄塵濁

而託清虛。何似託身宮禁。然使當時若不託身宮禁。而戀戀於人世之佳偶。必至埋骨成灰。焉得如今日之受享清福耶。夫亦可以自慶矣。○韓公子。應是韓童子之誤。蓋用吳王女紫玉故事也。埋骨成灰。即用歌中歿命黃墟語。舊注謂韓非爲秦之諸公子。借以況韓錄事。不思此宮人也。何由而愛韓錄事耶。

#### 屈復

宮人非情願入道。故一二云然。結和韓也。當時如愛韓而嫁。白首偕老。何至今日爲女道士。孤眠至死乎。

#### 程夢星

0 中晚此題詩甚多。不止于朱所枚舉。大抵唐之宮人入道。亦如樂府之邯鄲才人嫁爲廝養卒婦題。有風致可以寄託。作者固不惜語言也。

#### 紀昀

〔詩說下〕何以以下取韓錄事送宮人入道也。曰。晚唐卑卑之音（評本本條なし）。〔評本〕庸俗。○韓公子。當是借用吳王小女紫玉魂見韓重事。長孺注誤。

#### 馮浩

0 文集（二）有爲濮陽公奏韓琮充判官狀。舊書志。都督都護府上州錄事。從九品上階。按。琮爲詩人。與義山並稱。詳代璧啓（文集三爲舉人獻韓郎中琮啓）。舊紀。書開成三年六月。出宮人四百八十。送兩街寺觀安置。此固特紀其多者。然琮已在涇原幕。而三

年義山正在京。則必是時作矣。中晚唐頗多此題。

1 徐（逢源）曰。李亢獨異志。秦併六國時。太白星竊織女侍兒梁玉清衛承莊。逃入衛城少仙洞。四十六日不出。天帝怒。命五岳搜捕太白歸位。玉清謫於北斗下掌春。句用此事。按。謂既謫在人間。又追還上界。真無如何也。

4 四時之立與分至。共八日。皆有仙真乘三素雲。但雲色不同。仙真亦異耳。

5 用弄玉事。

8 史記。韓非者。韓之諸公子也。按。借古人以點姓。詩家泛例。不必更有事在也。俞南史疑其用紫玉韓重之事。則以童子爲公子。必不可矣。詩言倘有冶情。則從此終身埋恨。戲錄事兼醒原唱。

張采田

〔會箋〕馮氏謂韓錄事即爲濮陽公奏充判官之韓琮。不知判官與錄事。官品自別也。又引舊紀（中略）。謂詩作於是時。夫唐俗重道。宮人入道者。歷朝多有。史特紀其最多者耳。卽詩人集。此題亦數見。安得定指爲開成三年作耶。

〔辨正〕此詩庸俗與否。姑不必論。然紀氏敢以庸俗目義山。是必紀氏自爲之詩高勝於義山而後可。余嘗讀紀氏詩集。所作皆本朝陋習。豈特不及晚唐。并不及宋元。未見有不庸不俗之佳篇也。噫。批尾家儻。詎易言哉。聊書於此。以告後之評義山詩者。

方回

既是宮人。何由可愛韓壽。若用紅葉題詩。後出爲韓姓人所得。事

出小説。未可輕信。(紀批「此用紫玉韓重事。注誤甚。○亦義山之下乘」)

### 胡以梅(宮詞類)

言宮女乃謫降凡間。今天上星使追還。不能自主。而雙童扶之上瓊輦以去。朝金殿。侍玉樓。已在天界矣。鳳女似謂秦弄玉。吹簫乘鳳之女。彼想塵凡而成別。惟有月娥。避夫入月。所以得同遊矣。結則戲之之詞。言若學吳王女紫玉愛韓仲。直至埋骨。尙未休也。

韓暗指錄事。按韓仲非公子。或錄事是公子耳。星使雙童。皆烏有先生。總之發端不肯尋常。是其主意。

### 近代注釋

〔森槐南〕中卷一七頁。

\* \*

0 韓錄事 未詳。馮浩は韓琮にあててゐるが、確證はない。なお全唐詩には韓琮の詩二四首を収めるが、もとより同題の作品はない。

送宮人入道 朱鶴齡は張籍以下六人の作者名をあげる。張は五律、王建・戴叔倫・于鵠・項斯は七律。朱が元稹の名をあげるのは誤り。その他殷堯藩・張蕭遠にもそれぞれ七律あり。何焯がひきあいに出した二作を録しておく。

〔項斯送宮人入道〕願隨仙女董變成。王母前頭作伴行。初戴玉冠多誤拜。欲辭金殿別稱名。將敲碧落新齋磬。卻進昭陽舊賜爭。且暮焚香繞壇上。步虛猶作按歌聲。

〔于鵠送宮人入道歸山〕十歲吹簫入漢宮。看修水殿種芙蓉。自

傷白髮辭金屋。許著黃衣向玉峯。解語老猿開曉戶。學飛雛鶴落高松。定知別後宮中伴。應聽緱山半夜鐘。

宮人 〔史記四九外戚世家〕呂太后時。竇姬以良家子入宮侍太后。太后出宮人以賜諸王各五人。竇姬與在行中。〔文選四九范曄後漢書皇后紀論〕及光武中興。六官稱號。惟皇后貴人。金印紫綬。俸不過粟數十斛。又置美人宮人采女三等。並無爵秩。歲時賞賜充給而已。

入道 〔惠通駁顧道士夷夏論〕泥洹滅度之說。著乎正典。仙化入道之唱。理將安附(弘明集七)。〔真誥六甄命授〕屢燒香左右者。令人魂魄正。而恒聞芳風之氣。久久乃覺之耳。覺之則入道。入道則得仙。得仙則成真。〔唐律疏議一二私入道則〕諸私入道及度之者。杖一百。〔疏議曰。私入道。謂爲道士女冠僧尼等。非是官度而私入道〕。

1 星使 (1)〔後漢書方術李郃傳〕和帝即位。分遣使者。皆微服單行。各至州縣。觀採風謠。使者二人當到益都。郃因仰觀。問曰。二君發京師時。寧知朝廷遣二使邪。二人。問何以知之。郃指星示曰。有二使星。向益州分野。故知之耳。(2)〔晉書一三天文志〕流星。天使也。自上而降曰流。自下而升曰飛。大者曰奔。奔亦流星也。星大者使大。星小者使小。聲隆隆者。怒之象也。行疾者期速。行遲者期遲。朱鶴齡は以上二つの典據をあげるが、馮浩は(2)のみをとり、さらに徐逢源によって獨異志を引く。ことばとしては晉書、事柄としては獨異志というわけだ。しかし星使には李郃傳を

あげるのが普通だろうし、梁玉清の話も用いられた可能性があるのに止まる。なおこの話は太平廣記卷五九梁玉清の條に錄される獨異志佚文で、冒頭に「東方朔內傳云」とある。

唐人の用例としては、「孫逖送周判官往合州詩」星使行看入。雲仙意轉催。「高適送柴司戶充劉卿判官之嶺外詩」月卿臨幕府。星使出詞曹。「靈一江行詩」月高星使東看遠。雲破霜鴻北度遲。「原化記」據仙經曰。蠶魚三食神仙字。則化爲此物。名曰脉望。夜以規映當天中星。星使立降。可求還丹（廣記四二何諷條）。

追還 「風俗通十反」趙相汝南李統。：聞知之。歷收其家。遣吏追還。「劉毅上書請著太后注記」崇晏安之政。敷在寬之教。興滅國。繼絕世。錄功臣。復宗室。追還徙人。蠲除禁固（後漢書一〇下鄧皇后紀）。

自由 「後漢書一〇下閭皇后紀」於是（閭）景爲衛尉。耀城門校尉。晏執金吾。兄弟權要。威福自由。「玉臺新詠一爲焦仲卿妻作」阿母謂府吏。何乃太區區。此婦無舉動自專由。吾意久懷忿。汝豈得自由。「柳宗元酬曹侍御過象縣見寄詩」春風無限瀟湘意。欲採蘋花不自由。

2 「八道祕言」苟誠感上會。精悟輝晨。亦將得見丹景之炁。三素飛雲。八輿朱輦。紫霞瓊輪。上清淨眇。徊轡三元。高皇乘節。靈童攀轅。太素擁蓋。南極臨軒（雲笈七籤五一）。

雙童 「曹丕折楊柳行」西山一何高。高高殊無極。上有兩仙童。不飲亦不食。與我一丸藥。光耀有五色。「駱賓王代女道士王靈妃

贈道士李榮詩」雙童綽約時遊陟。三鳥聯翩報消息。「李白流夜郎半道放還示息秀才詩」棄劍學丹砂。臨鑪雙玉童。「楊嗣復贈毛仙翁詩」羽衣茸茸輕似雪。雲上雙童持絳節。「道書」凡道士浴身及洗手面之時。：祝曰。四大開朗。天地爲常。玄水澡穢。辟除不詳。雙童守門。七靈安房（雲笈七籤四一櫛沐浴條）。

綠瓊輶 「存思三洞法」呪曰。：子能行之。眞神見形。玉女可使。玉童見靈。三元下降。以丹輿綠輶。來迎兆身。上昇太清（雲笈七籤四三）。

「楚辭九歌東君」駕龍輶兮乘雷（王注。輶。車輶也。〔補注〕方言曰。輶。楚韓之間謂之輶。載雲旗兮委蛇。〔又大招〕瓊轂錯衡。英華假只（王注。言所乘之車。以玉飾轂。以金錯衡。英華照耀。大有光明也）。ただし義山以前の瓊輶の用例は未見。

3 九枝燈 「一片181」九枝注參照、集釋稿（本學報五四冊四一七頁）。

金殿 「文選三一江淹雜體詩劉文學感遇」華月照方池。列坐金殿側（李注。古歌辭曰。上金殿。酌玉樽）。「王昌齡長信秋詞」奉帚平明金殿開。且將團扇共徘徊。

4 三素雲 「黃庭內景經上有章」四氣所合列宿分。紫煙上下三素雲（三素者。紫素白素黃素也。常存三元妙氣。上下在身。則形神通感）。「又隱影章」控駕三素乘雲霞（外指事也。三雲九霞。神仙之所御也）。金輦正立從玉輿。「大洞真經八章」上元太素三元君曰。太素三元宮中。有三華之氣。生於自然也。似芙蓉之暉。：太微小

童。負五圖於帝側。絳宮真人。承五符於胎尊。合變於三素之氣。得形於晨燈之光（雲笈七籤八）。〔陶弘景水仙賦〕窺芳士於蒙穀。求呂梁於石城。從務光於底柱。索龍威於洞庭。迎九玄於金闕。謁三素於玉清。〔鮑溶蕭史圖歌〕霜綃數幅八月天。綵龍引鳳堂堂然。小載蕭僊穆公女。隨仙上歸玉京去。仙路迢遙煙幾重。女衣清淨雲三素。

玉樓 既出。六九七頁參照。

5 鳳女 もとより列仙傳卷下の、秦人が弄玉のために「鳳女祠」を作ったという義山愛用の故事をふまえる。〔沈佺期送金城公主適西蕃應制詩〕那堪將鳳女。還以嫁烏孫。義山にまた〔西溪86〕鳳女彈瑤瑟。龍孫撼玉珂。

顛狂 〔杜甫江畔獨步尋花七絕句之一〕江上被花惱不徹。無處告訴只顛狂。〔元稹遊三寺回呈上嚴司空詩〕謝公恣縱顛狂掾。觸處閑行許自由。〔白樂天感櫻桃花因招飲客詩〕漸覺花前成老醜。何曾酒後更顛狂。

久別 〔孔子家語儒行解〕久別則聞流言不信。〔玉臺新詠四顏延之秋胡詩〕存爲久離別。沒爲長不歸。〔又鮑照夢還詩〕慊歎論久別。相將還綺幃。〔劉長卿送嚴維赴幕詩〕久別耶溪客。來乘使者軒。

6 月娥すなわち男のもとを離れ月へと去った姮娥は、義山が好んでとりあげる題材で、例の〔常娥33〕の七絶のほかにも、〔霜月8〕青女素娥俱耐冷。月中霜裏鬪嬋娟。（七絶集釋稿）本學報五

○冊四六〇頁參照〔月夕216〕兔寒蟾冷桂花白。此夜姮娥應斷腸。月娥 〔孟郊看花詩〕月娥雙雙下。梵豔枝枝浮。義山にまた、〔燕臺詩冬545〕浪乘畫軻憶蟾蜍。月娥未必嬋娟子。嬋獨 〔王初青帝詩〕青帝邀春隔歲還。月娥嬋獨夜漫漫（唐詩鼓吹六）。

同遊 〔荀子法行〕曾子曰。同遊而不見愛者。〔玉臺新詠三王鑒七夕觀織女詩〕同遊不同觀。念子憂怨多。〔文選三〇謝朓和伏武昌登孫權故城詩〕于役儻有期。鄂渚同游衍。〔杜甫江上值水如海勢聊短述詩〕焉得思如陶謝手。令渠述作與同遊。〔元稹和樂天夢亡友劉太白同遊二首之二〕縱使劉君魂魄在。也應至死不同遊。

7 當時 〔文選一一何晏景福殿賦〕故當時享其功利。後世賴其英聲。義山にまた、〔燕臺詩冬545〕當時歡向掌中銷。桃葉桃根雙姊妹。

韓公子 〔1〕韓壽（方回が否定的に引く）。晉書卷四〇賈充傳に見える韓壽窃香の故事。韓壽に思いを寄せたのは宮女ではない。〔2〕紅葉題詩の韓姓の相手（同じく方回が否定する）。〔雲谿友議下題紅怨〕明皇代。以楊妃號國寵盛。宮娥皆願衰悴。不備掖庭。常書落葉。隨御水而流云。舊寵悲秋扇。新恩寄早春。聊題一片葉。將寄接流人。顧況著作。聞而和之。既達宸聰。遣出禁內者不少。（下略）〔本事詩情感〕顧況在洛乘門。與三詩友遊於苑中。坐流水上。得大梧葉。題詩上曰。一入深宮裏。年年不見春。聊題一片葉。寄與有情人。況明日於上游。亦題葉上。放於波中。詩曰。花

落深宮驚亦悲。上陽宮女斷腸時。帝城不禁東流水。葉上題詩欲寄誰。(下略)本事詩情感篇にはいま一條類似の話を載せるが、いずれも韓姓の人物は登場しない。「徐凝上陽紅葉詩」洛下三分紅葉秋。二分翻作上陽愁。千聲萬片御溝上。一片出宮何處流。(3)韓非子(朱鶴齡ら)。「史記六三老莊申韓列傳」韓非者。韓之諸公子也。「儀禮喪服子夏傳」諸侯之子稱公子。(4)韓憑(何悼)。「搜神記卷一一・列異傳・韓朋賦」に見える韓氏と妻の何氏の話。(5)韓重(俞南史ら)。「搜神記一六・錄異傳」に見える吳王夫差の女紫玉と「童子」韓重のお話。姚培謙が言及するのは紫玉の亡霊の歌う文句で、「悲結生疾。沒命黃爐。命之不造。冤如之何。」

「公子」とある以上、直接的には韓非子をさすのだろうが、その裏にさまざまな相思の物語の主人公たる男性の名が見え隠れする、といったところか。

8 「文選三九江淹詣建平王上書」仰惟大王少垂明白。則梧丘之魂。不愧於沈首。鵠亭之鬼。無恨於灰骨。「梁簡文帝怨歌行」裂紈傷不盡。歸骨恨難祛。「白樂天李夫人詩」又不見太陵一掬淚。馬嵬坡下念楊妃。縱令妍姿豔質化爲土。此恨長在無銷期。

埋骨 「後漢書列傳二八度尚傳」(張)磐備位方伯。爲國爪牙。而爲尚所枉。受罪牢獄。乞傳尚詣廷尉。面對曲直。足明眞僞。尚不徵者。磐埋骨牢檻。終不虛出。望塵受枉。「元稹放言五首之三」縱使被雷燒作燼。寧殊埋骨颺爲塵。「李賀官街鼓詩」漢城黃柳映新簾。柏陵飛燕埋香骨。

成灰 「文選二八陸機挽歌詩三首之二」昔爲七尺軀。今成灰與塵(李注淮南子曰。吾生也有七尺之形。吾死也有一棺之土。韓子曰。死者始而灰。已而土。李尤九曲歌曰。肥骨消滅隨塵去)。

「白樂天燕子樓三首之三」見說白楊堪作柱。爭教紅粉不成灰。

恨未休 「李白君子有所思行」歌鐘樂未休。榮去老還逼。「杜甫戲爲六絕之二」楊王盧駱當時體。輕薄爲文晒未休。

\* \* \*

馮浩は本篇を開成三年(八三八)に係けるが、すでに張采田が駁するように信ずるに足りず、當時流行の詩題であるならあるいは題詠の可能性もあるか。安徽師大年表も不編年。

生眞面目で平板な同題の諸作と異なり、失意の事を得意の事として説く(姚培謙)皮肉な歌いぶり、これも戲作的氣分が強い。7句の韓公子が韓錄事を暗示するかどうか、朱鶴齡は疑問視し、姚は否定するが、朱彝尊・屈復・胡以梅・馮浩・森槐南は肯定。後者に従うべきである。これに關連して、結の二句は解釋が四通りに分れる。

宮人の韓公子への愛に			
B 否定的		A 肯定的	
B <sub>2</sub> 姚	B <sub>1</sub> 馮・森	A <sub>2</sub> 屈	A <sub>1</sub> 胡

常識的にはB<sub>1</sub>の線だろうが、しかし問題は残る。

1 天帝の遣わされた星の使者が降って來られ、俗界に住む身に再



び天界へ送還が決定されました。しかし、これも別に自分の意志によるわけではありません。宮中から道観へ、有りがたいような有りがたくないような決定。

2 さて、お迎えの二人の仙童が、緑色の美玉に飾られた轎の美々しい車に助け乗せてくれます。

3・4 天界につきましたあとは、九枝の燈の粲然と輝くもと、金色の御殿で帝におめどおりし、三色の雲が神祕にたなびくなか、玉の樓閣でお側近く仕えるのです。

5・6 これからさきは、鳳女弄玉のような来る日も来る日も男とのたわけた暮しとは永久におさらばして、月世界の姮娥のような

孤獨のやもめ暮しの、さあ、お仲間入りです。

7・8 もしも「一ト目でも君を見たものであったら、必らず戀と云ふことを知り染めて、」(森) 俗世とは全く隔絶の場所で、二度と再び會うことのかなわぬ公子を慕い、冷い土に骨を埋め灰となつてもまだ恨みは盡きることがなかったでしょう。馮注を敷衍する森のB<sub>1</sub>説で、姚の出した疑問は解けるが、「當時」——あのときを事實上無視するのがやはり氣になる。姚と屈の解釋でも「當時」は依然落着きが悪い。

(松田 佳子)